

第3章

各地区の調査報告
(代表事例)

第3章 各地区の調査報告（代表事例）

第1節 北部地区

北部地区の代表事例を紹介するにあたり、豊年祭やムラウドウイ、盆行事の中で棒術が披露されるが、詳細な代表事例の紹介については、次のような基本的な考え方に基づいて選定した。

- ① ムラ社会で今なお行事が盛んにおこなわれており、棒術の呼称に多様な特徴を有していると思われること。
- ② 棒術を体現する組織基盤が比較的強固で、地域の特性を有すると思われるような棒術が現存すること。

1 名護市数久田（シッタ）豊年祭

【行事の概要】

令和5年度の「ホウネンサイ（豊年祭）」は、旧暦8月9日、11日、12日【新暦9月23日（土）、25日（月）、26日（火）】の3日間開催され、その中で、「ボー（棒）」が数久田区出身の高校生以上40歳未満の男性によって「ボーグミ（棒組）」が構成され披露される。数久田では豊年祭への社会人男子の参加が義務づけられているという。ここでいう社会人男性とは、高校生、大学生を除く40歳未満をさす。構成員にもかかわらず参加できない場合は、「ウガンヒー（御願費）」と呼ばれる費用7千円が徴収されることになり、ムラ行事への積極的に参加することが求められる。

参考までに、2024年（令和6）、4月現在の数久田区民は810人（男性421名、女性389名／世帯数は327）。1981年（昭和56）当時の調査¹⁰によると、人口が1,109（男性553名、女性556名／世帯数250）で、40年余りで人口が27%減少しており、特に女性人口が30%減少した。ただ、世帯数は31%増加しているが、全体的には世帯構成員の減員と高齢化やアパート新築による世帯増が一因と思われる。

豊年祭初日の翌日は、「ヒヒョウカイ（批評会）」と呼ばれ、豊年祭初日の演目について先輩方が批評する会がもたれる。以前は、「ヒハンカイ（批判会）」とも呼ばれたというが、ネガティブな表現だということで呼称を改めたという。批評会の指摘を受け、残り2日間の行事の充実を期することになる。

豊年祭初日の朝は、ボーシンカ（棒組）は「ブクジー（福地原）」のテイシンドコとよばれる拝所にてニガミ（根神）とよばれるカミンチュ（神女）と一緒にウガン（御願）を行い、午前9時から午後3時頃まで、その場でボー（棒）の演武を行う。そこでの演武は、奉納と練習を兼ねるという。豊年祭の3日間は、舞台芸能22演目のプログラムが始まる前後で各30分の棒組による2回の演武が公民館前の広場で披露される。とくに後半のみ棒組のトリを務める演武は、「サンニンボー（三人棒）」が行われ、豊年祭のプログラムをしめる。この一連の行事は、今日では「ホウネンサイ（豊年祭）」と呼ばれているが、かつては「ムラウドウイ（ムラ踊り）」や「ハチガチウドウイ（八月踊り）」、「ムラアシビ（ムラ遊び）」などと呼ばれた。

豊年祭初日の朝、ニーガミ（根神）はアサギで祈願する。午前中は、ボーシンカだけがトドロキノタキ（轟の滝）近くの拝所（福地原のテイシンドコ）に向かう。午後には、テイシンドコでの練習を終えて、集落に下りてくるが、この時三線や笛でカチャーシーを踊り「トーシンドーイ」の音曲に合わせて繰り出す。また、棒といっしょに山から取ってきたタケ（竹）を5本ないし7本をとってくる。

『名護市史 研究資料第93集 芸能調査資料7 名護地区の芸能』では「棒組」の表記に「この竹に乗せて『棒の神様』をお連れする」¹¹という興味深い記載があるが、2005年に聞き取りされた、この伝承については、70代の前区長に確認したがわからないといい、伝承が断絶している可能性がある。ただ、戦後集落内にあった公民館（2005年頃まで）の頃には、竹は公民館の前に小さな舞台（バンク）の上で遊ぶ子どもらを追い払うために実用的に用いられていたと語る。新公民館では、舞台製作をしなくなり、竹を使用することの現実的な役割がなくなかった。そのため、その伝承も消失した可能性もあるが、現在は竹を取ることもなくなったという。

10 津波高志他著『沖縄国頭の村落 下』（1982）24p.

11 『名護市史研究資料第93集 芸能調査資料7 名護地区の芸能』（2009 名護市教育委員会文化課市史編さん係）の「棒組」

2005 年（平成 17）6 月に竣工した体育館を備えた、国道側の埋め立て地に立つ区公民館の円形になった前庭が 2023 年現在、豊年祭の際にスーマキを演武する場所になっている。

ボーシンカが山から下りてきたときに、屋号メージョーヤーの島袋門中本家近くのアジマー（交差点）で島袋一門に迎え酒をふるまわれ、この場で棒の型（三種類）を演じるという。メージョーヤーこと島袋家での棒演武披露には、ムラ踊りの導入の始祖を顕彰する意味が読み取れる。メージョーヤ（前門屋）の初代・島袋山戸はムラ踊りを数久田に導入したとされるキナーヤの娘を嫁にしたという。その縁でメージョーヤは棒で重要な役目を担ってきた。ただ、ボーがいつ頃に伝わったかは不明とされるが、ムラ踊りと同じ時期ではないかとされる。棒にまつわる言い伝えとして、夕方には、棒シンカを先頭に道ジュネーが始まり、「クニムトウ」の拝所でも神女による御願が行われ、アサギに着いたら道ジュネー一行のうち棒シンカだけがニガミとともに御願をし、ニガミと酒を交わす。豊年祭の三日間（旧 8 月 9 日、11 日、12 日）、毎日棒術に出る人たちがメージョーヤー（島袋家本家）で拝みがされる。

【由緒・来歴】

『名護市史 芸能編』によると、豊年祭は集落の豊年満作と区民の健康祈願を目的に開催される。ムラウドウイそのものは 1851 年（尚泰 5／咸豊元／嘉永 4）に数久田に伝わったとされ、導入したのは「ウェーキヤー（富裕家）」で知られるキナーヤ（喜納屋・玉城家）とされる。これとは別に、幸喜部落（数久田から南側 2 つめの集落）は首里の踊奉行だった人物から踊りを習い、数久田はその幸喜から習ったとの伝承もある。ただ、後者のことは 1879 年（廃藩置県）以後の時期のことをさすようである。

【演武の種類と内容】

棒材は釘さえ打てないほどの強度の高い桤材の棒を使用するが、練習時から毎年 10 本ほどが折れるので、国頭村森林組合から桤材を調達し、安富祖の製材所で毎年 30 本補充しているという。それほど強く互いの棒をたたきあうことが数久田のボーの魅力として人々は誇りにしており、思い切り強く叩き、組棒でも相手の攻撃をかわして高く飛び上がるほど観衆の評価は高く声援を得ることができる。数久田のボーの特徴は、型による演武、2 人以上の打ち合いの演武、棒組全員による集団演武の「スーマキ（総巻き）」の 3 通りがあるが、打ち合いボーの激しさから「オーイボー（喧嘩棒）」とも呼ばれている。

棒の型は 13 種類。最初は棒組全員による「スーマキ（総巻）」、次に「マヤー（猫）棒」、「ロクシャクノウラ（六尺の裏）」は六尺棒と三尺棒の組棒と続く。前半の 3 つの型はこの順序による。（写真 3-1-1～10 参照）。「スーマキ（総巻）」は全員で行う（令和 5 年度は 20 名）。赤帯（奇数）と青帯（偶数）に分かれてチングー巻（機織の道具）やナカジン（中陣割り）といって、中心から二手に分かれ、それぞれにゆっくり歩きながら円陣を組みながら、赤帯と青帯の先頭者が円陣の 6 時の位置に移動した時に棒の型を紹介して、その後の者が列を成し隊列を作り、出入口へはけていく。詳細な陣形の推移については、図 3-1-1 のとおりである。スーマキが終わると、基本的には二人組による型の演武が公民館前の中庭で紹介される。使用する棒は六尺棒、三尺棒、ヤリの突いた六尺棒と三尺棒。マヤー棒は、演武内容が猫の喧嘩を表しているといい、手数が最も多いため経験を積んだ上手な人が担当する。最初の 3 つの型の次は「中棒」として二人一組で行う。「ムッコーガメー（向こう構え）」、「ミーボー（新棒）」、「ユンタンジャグワ（読谷山小）」、「ヤイトウシャク（ヤリと尺）」、「ハラボー（空棒）」、「ヤイヌウトウ（ヤリと弟）」で構成される。6 つの型を織り交ぜて演目数を増やしている。ムッコーガメーは、棒を両手で頭上に持ち上げ、頭（向こう）を打たれるのを防ぐ構えをもつ。ミーボー（新棒）、は戦後、数久田で創作された型をいう。ユンタンジャグワは、戦前読谷から習ってきた型だという。ヤイトウシャクは、槍と三尺棒を使った型。ハラボーは他と異なり、棒を叩き合わせないという特徴がある。ヤイヌウトウは、手数が少なく、他の棒よりもやさしい型とされる。後半は、「トゥヌギヤー（飛棒）」、「大読谷山（ボーユンタンジャ）」、「ヤイボー（ヤリ棒）」、「サンニンボー（三人棒）」の順に行う。（2006 年の演目の後半はこの通りにはなっ

いなかったという。) トウヌギ(ジ) ヤーは「トビボー」ともいい、あちこちに飛ぶのが特徴である。サンニンボーは、三人で演じることによるもので、この型は舞台芸能の後半の部のみに行われるものだという。『名護市史 芸能編』)

令和5年豊年祭での棒はプログラム順につぎの通りである。全部で22 演目であった。①「スーマキ」、二人一組による演武が②「マヤ棒」、③「ロクシャクヌウラ(六尺の裏)」、④「ムッコウガメ(向こう構え)」、⑤「シャクノウラ(尺の裏)」、⑥「ユータンジャーグウ(読谷小)」、⑦「ムッコウガメ(向こう構)」、⑧「ヨコウチボウ(横打棒)」、⑨「ミーボー(新棒)」、⑩「シャクノウラ(尺の裏)」、⑪「ヨコウチボウ(横打棒)」、⑫「カラブイ(空棒)」、⑬「ヤリと尺」、⑭「ムッコウガメ(向こう構)」、⑮「シャクノウラ(尺の裏)」、⑯「ヤリとウトウ(弟)」、⑰「ムッコウガメ(向こう構え)」、⑱「ムッコウテイ(向こう手)」、⑲「トウヌギヤ(飛棒)」、⑳「ボーユンタンジャー(大読谷)」、㉑「ヤイボウ(ヤリ棒)」、三人一組による「サンニンボウ(三人棒)」。市史の記述にはない型がいくつかみられるが、基本的には伝統的な順番の構成で演武された。



写真3-1-1 スーマキの先頭者の赤帯(左)グループと青帯(右)グループに分かれた後の隊列

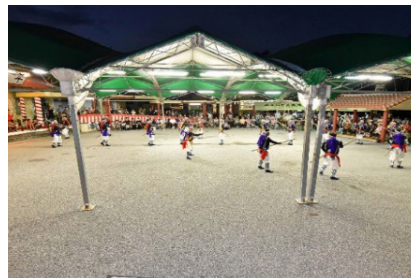


写真3-1-2 スーマキの青帯(舞台側)グループと赤帯グループ(出入口側)



写真3-1-3 スーマキ後、最初の演武のマヤー棒(三尺棒と六尺棒による演武)で手数が最も多い棒



写真3-1-4 ムッコウガメ(向こう構え)



写真3-1-5 戦後数久田で作られた棒型のミーボー(新棒)



写真3-1-6 ヨコウチボー(横打棒)



写真3-1-7 ヤイヌウトウト(ヤリと弟)



写真3-1-8 ボーユンジャー(大読谷)

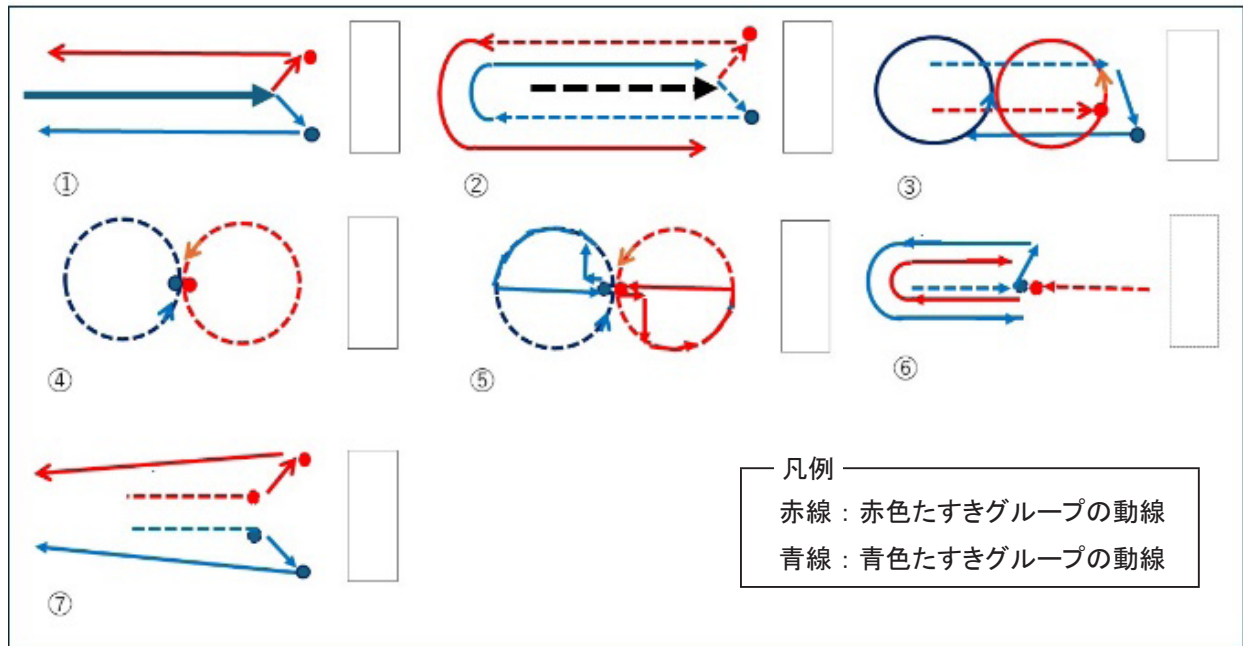


写真3-1-9 棒演武の最後を飾るサンニンボー(三人棒)



写真3-1-10 豊年祭当日の公民館前に特設のテントが張られた広場が作られ、舞台が設置される。棒演武はその中庭で行われる

図3-1-1 数久田区スーマキの隊列の推移図



1. 出入口からバンク（舞台）へ向けて一列で赤色のたすきグループ（以下「赤色G」と略す）。赤色Gは腰には紫色の帯をしめる。また、紫色のたすきのグループ（以下「紫色G」と略す。）は腰には赤色の帯をしめる。赤色Gと紫色Gの先頭者は各金色の羽織を着け、六尺棒をもつ、グループ構成員も羽織に六尺棒をもつ。ただ、最後尾者は金色の陣羽織に、唯一槍をもつ。
2. 赤色Gが外回り、紫色Gが内回りで二列隊列で並んだ後、かけ声とともに棒を高く掲げる。
3. 紫色Gの先頭者がバンクに向かって左列から右側に飛び跳ね、移動して列に対面する。その後を同グループが外回りに移動し後方に円陣をつくる。その二つの円陣を「カホウ」と「ゴホウ」と呼ぶ。同様に赤色Gの先頭者の後に続き、前方にそれぞれ反時計回りに円陣をつくる。
4. 赤色Gと紫色Gの円陣は、大太鼓の叩く拍子に合わせて、足を広げてゆっくり歩く。赤色Gと紫色Gの先頭者がそれぞれ中央に来た時に、両者がお互いに肩をぶつける。その合図で、アナウンスは「以心伝心」と叫ぶ。
5. 先頭者は各自陣の内側に飛び跳ねて、棒の所作を行い、半分ほど移動して各右側に移動し、反時計回りに半分ほど回ったところで、お互いに直列に向き合う。両者が中央で向き合った時に、先頭者が下段打ちを行う。
6. 紫色Gの先頭者が左側に飛び跳ねて、今度は紫色Gが外側から、赤色Gが内側から移動して二列になる。
7. 最後に全員が「エイ！」と棒を高く掲げ、構えを行った後、各先頭者が左右に飛び跳ねて、列に対面するように移動して、その後を各グループの構成員が追隨して、出入口にはけて終了する。

【演武の組織と稽古・継承方法】

豊年祭では、「ウドウイグミ（踊り組）」と「ボーグミ（棒組）」によって演じられるが、棒の経験があり演目全体に詳しく、「ジンブンモチ（知恵者）」が「ボーカシラ（棒頭）」と呼ばれるリーダーになる。ウドウイグミが豊年祭全体を仕切る会長職で、令和5年度は知花広が務め、指導的な教師も兼ねた。また、棒頭は比嘉将が務め、教師助手には島袋崇也須があたった。ボーグミは、男性のみで、年少者は中学生から40歳未満の男性であるとされるが、年配者がでることもある。

棒の練習は旧暦8月1日の「ボーウガン（棒御願）」を経て始まる。この日程は若干の変更もあるが。夕刻、「ミーバシ（新しい橋／前平橋のこと）」に集まり、轟の滝に向かって安全祈願をする。これをティクバイ（手配）といい、この時に各棒の配役を決める。2日後の旧8月3日から「ハマ（浜）」（現在は野球場のグラウンド）で練習を開始する。浜では安全祈願の「ハマウリウガン（浜下り御願）」をする。旧8月9日の本番当日は午前10時頃から午後4時頃まで轟の滝近くで練習の仕上げをする。〔『名護市史 芸能編』〕

数久田のボーは、互いの棒を思い切り強く叩いたり打ち込んだりするという手加減をしない勇壮さにある。そのため所定の箇所には棒が合わない、骨折などの大けがになるため、ケガも絶えないという。棒の強度に関して、公民館で1年～2年寝かせ熟成させることで強度を高め折れないような工夫をするという。ボーシンカは全員が思い切り棒を合わせ打つ演武を行うため、少しでも気を抜くとケガをしてしまうことになる。区長さんが豊年祭行事を行う上で、一番気を遣うのが「豊年祭」が終了するまで棒方にケガ人がでないことだという。

【演武の衣装と道具・楽曲】

衣装は、白の上着に白のズボン、黒地に青の縁取りのある羽織（マヤー棒の二人はきらびやかな羽織）に赤や紫の長巾でたすき掛けをし、腰も赤や紫の長巾で締める。足には脚絆を巻き、地下足袋、頭は紫の長巾で締めるか、白鉢巻である。地下足袋だけは自前であるが、それ以外は区が用意する。演武の際に使用する楽器は、ドラ鉦と大太鼓、ピーラルラー（路次楽）がある

【行事継承の今日的課題】

踊り手が少なくなっていることもあり、男女関係なく中学生、高校生、大学生も豊年祭で演舞（武）を行う。踊りに関しては数久田に女性の舞踊の教師がいるので、指導してもらっている。以前は豊年祭の前、2カ月ほど前から練習していたが、仕事を持っている人もいたり、期間が長くなり負担も大きいので、最近は短期間（ほぼ2週間）で練習を重ね仕上げるという。コロナ禍後の2021（令和3）年度の豊年祭は1日のみの開催として、舞台芸能も通常演目の半分くらい（通常は23ほどの演目数）にして縮小して開催したという。また、外部の招待や案内も廃止して区民だけを対象とし、全体のプログラムも午後10時頃には終了した（通常は午前0時近くで、昔は組踊が長いもので3、4時間のものがあり、午前3時頃までかかったこともあったという）。2022年度からは通常のような形に戻して実施している。コロナの影響などもあり、芸能の踊り手も少なくなったという。写真や映像による記録保存も心掛けており、令和4年度、令和5年度はアルバムやDVDを制作し記録保存を心がける。



写真3-1-11 令和5年度数久田区豊年祭
アルバムとDVD(2本組)

2 宜野座村宜野座区の八月アシビの棒演武

【行事の概要】

宜野座の八月アシビは、2005 年（平成 17）2 月 21 日に国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択され、宜野座区と宜野座区二才団が保護団体として行事を支えている。宜野座村（教育委員会）は『記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財 宜野座の八月あそびー記選 宜野座の八月あしび 民俗文化財調査（祭り・行事を含む）報告書―』（2014 年3月刊行）で詳細に記録保存を試みている。

宜野座の八月アシビは2年に1回開催される。宜野座区の青年会（18 歳～ 34 歳）と成人会（35 歳～ 54 歳）で組織する「ニーセーダン（二才団）」が中心となり、旧暦8月 15 日頃に開催される。宜野座区では「ハチガチアシビ（八月遊び）」と呼ばれる。この豊年祭の中では、午後3時頃から「ヌンドウルチ（ノロ殿内）」、「ニーヤ（根屋）のニシンダ」、「ウッカー（大川按司）の屋敷跡」、「シシヤー（獅子屋）、またはシシアンチコー（獅子（頭）安置庫）」の拝所の順序で、ウガン（御願）を行い、その場でジカタ（地方）の「カジャデフー（かぎやで風節）」の音曲に合わせて、女性2人による舞踊とニーセーダン2人1組によるボー（棒）を楽曲が終わるまでに3組の演武が次々と奉納される。その後、獅子（ニーセーダン2人によって扮し）と地方【棒の場合はドラ（銅鑼）使用】、獅子舞の場合はサンシン（三線）、タイコ（太鼓）、ショウ（鉦）、ホラガイ（ホラ貝）、ピーラルラを使用】とともに集落内を巡る道ズネーが3箇所（図3-1-2¹²）で行われ「ヒラマチモー（平松毛）」と呼ばれる「アシビナー（遊庭）」に到着。ヒラマチモーに設置された「バンク（仮設舞台）」で八月アシビが午後6時頃から12 時頃まで行われる。八月アシビの中でも冒頭の演目である「獅子舞」については、メーカタ（舞方）が座を清めた後、獅子に化身した「カミ（神）」をバンクに招き入れることで、舞台公演が始まるという意味があるという。

2018 年（平成 30）の催事以降、コロナ禍で中止され 2023 年（令和5）に6年ぶりに開催された宜野座の八月アシビは、2023 年には新暦で9月 30 日（土）に行われ、舞台では 24 演目披露された。これら演目の中で棒が披露される。

「ボー」は六尺によるものがあり、ニーセーダンのみならず、子ども育成会や婦人会も参加して開催される。ヒラマチモーでの舞台の最初の演目は「シシマイ（獅子舞）」で、メーカタ（舞方）が「クーサンクー」の三線音曲で登場することで舞台を清める意味があるとされる。勇壮な舞踊である「メーノハマ（前之浜）」は空手の型が取り入れた一般的なものである。

2024 年（令和6）4 月現在の宜野座区の人口は 1,307（男性 658 人、女性 649 人）、世帯数 464。参考までに 1981 年当時¹³は人口 897 人（男 426 人、女 471 人）、世帯数 244 である。40 年余りで、人口で 46% や世帯数で 90%と顕著な増加傾向がみられる。

【由緒・来歴】

宜野座の八月アシビがいつの頃から始まったかについての詳細は不明だが、琉球王国時代から番所の筆者、その子弟の一部、また選ばれたシンカ、士族によって五穀豊穡を祈願するアシビが催されていたという。明治の頃になると、首里・那覇・泊から寄留した士族が伝えた芸能「ウカンシンウドゥイ（御冠船踊）」や「サムカーシバイ（寒川芝居）」などや「ウザガク（御座楽）」の演奏技術、さらには、沖縄戦中の 1945 年（昭和 20）では、米軍の民間人収容地コチャ（古知屋収容所）にいた県内各地の芸達者の影響を受けて、現在の形になったといわれる。

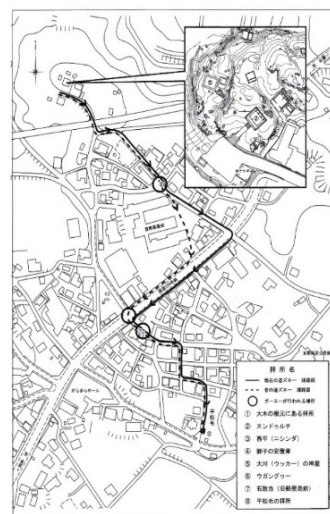


図3-1-2 集落の拝所位置と道ズネー順路

12 2024 年5月初旬の宜野座区の聞き取り調査による（出典は 2014 年の報告書）。

13 1981 年の人口統計は宜野座村勢要覧『GINOZA1981』による。

【関連祭祀儀礼】

令和5年度はコロナ禍の中で、中止していた八月アシビは6年ぶりに開催された。八月アシビの祭祀では、ノロ代役（大城）、区長（島袋）、ニセーダン（ニオ団）長（仲地）、その他4名で、ヌンドウルチ（ノロ殿内）、ニーヤ（根屋）、ウッカー（大川按司）の屋敷跡、シシアンチコ（獅子安置庫）の拝所でウガン（御願）とともにかじやで風節と3組（6名）のニーセーダンによるボーが奉納される。その後、集落内を巡る道ズネー（道巡り）を図3-1-2のとおり行う。「アシビナー（遊庭）」に設置された「バンク（仮設舞台）」で演舞が披露される。冒頭の演目の「獅子舞」では舞方が舞台の場を清めた後、獅子に化身した「カミ（神）」をバンク（仮設舞台）に招き入れる（図3-1-3）。

【演武の種類と内容】

棒は小学4年生以上の男子によって「ショウガクボー（小学棒）」が行われる。二人1組よってボーは六尺棒による二人組の棒が15組が行われる。中学生の男子による「チュウガクボー（中学棒）」も同様に二人1組よって型が披露され、六尺棒による二人棒が9組行われる。「サンシャクヤイ（三尺槍）」は2組、「シシマイ（獅子舞）」は舞方1名、獅子1頭に2名で行われる（写真3-1-12～19参照）。

「メーヌハマ（前之浜）」は2名で踊り、音曲は「前之浜節」「坂原口節」「与那原節」の3曲で構成された舞踊である。また、組踊『伏山敵討』の登場人物は次の8役で構成される。ティンガンヌアンジ（天願の按司）、タナバルヌワカアジ（棚原の若按司）、アンマー（母親）、カミチヨ（亀千代）、トウムイヌウフヌシ（富盛大主）、ヘンザウフヌシ（平安座大主）、イシカーヌヒーヤ（石川の比屋）、カリード（狩人）で構成される。



写真3-1-12 ヌンドウルチ前のかじやで風節の奉納演舞



写真3-1-13 ヌンドウルチ前での小学棒による奉納棒



写真3-1-14 ニーヤ(ニシンダ)の前で小学ボーを披露する小学生たち



写真3-1-15 ウッカー(大川)前で中学棒を披露する中学生たち



写真3-1-16 神アサギ前の広場で獅子を取り囲んでスーマキ



写真3-1-17 ヒラマチモーでの旗頭を中心にスーマチ



写真3-1-18 ヒラマチモーでの中学棒



写真3-1-19 ヒラマチモーでの成人によるボー

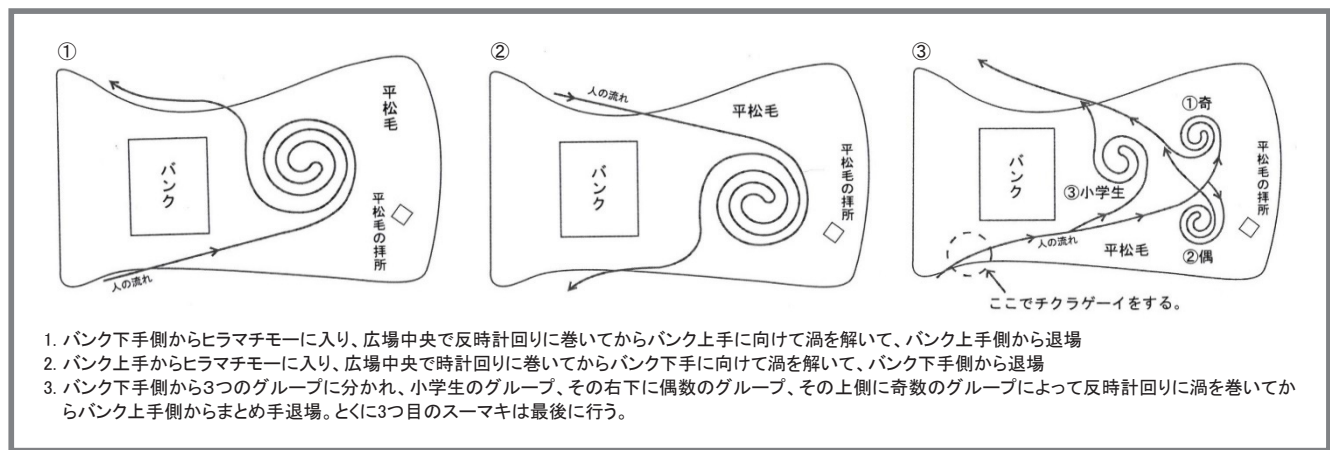


図3-1-3 宜野座区のスーマキ隊列の推移図(出典は2014年の報告書)

【棒術の組織と稽古・継承方法】

二才団が組織されたのは、1896年(明治29)の八月アシビからで、士族・平民の区別なく、当時は15歳から42歳までの男性で構成されていたという。その後、15歳から45歳までの男性となり、現在は18歳から54歳の男性で構成されている。沖縄戦以前は、ニーセーダン(二才団)は「ズリー(総会)」でニーセーガシラ(二才頭)、年長者の頭、年少者の頭、帳筆者、舞踊、組踊、劇、ボー(棒)のカシラ(頭)を決めていたが、現在は団員の推薦で二才団団長、副団長、会計の役職を決め、組踊、舞踊、劇、棒、救護の部長が二才団長の指名によって決められる。24演目の演者は、約40名、ジカタ(地方)7名、裏方を含めると総勢約100名でムラ行事が営まれる。二才団より認定された「シショウ(師匠)」(最長老は現在80代)の厳しい指導の下、半月ほどの短期間の稽古で与えられた配役を習得する。配役についての脱落は許されず、私生活を犠牲にしても八月アシビを成功させなければならないとされ、その精神は現在も受け継がれている。かつて、組踊は「ウッカーアジ(大川按司の屋敷跡)」、舞踊は「ヌンドウルチ(ノロ殿内)」、狂言(劇)は「イシキ(伊敷旧家跡)」で稽古が行われていたが、現在は全ての稽古は宜野座区公民館で行われている。

【演武の衣装と道具・楽曲】

ボー(棒)の演武者は白ズボン・白長袖シャツ・ズック靴に六尺・三尺棒、ヤリの用具を用いる。シーシ(獅子舞)は獅子頭の舞方は白ズボン、白シャツ、引羽織、橙色地金襴広帯、紫色の長巾腰帯と頭に紫色の長巾を被り、足は白黒縦縞脚絆に白足袋を履く。前之浜の舞では黒地紋付袷衣裳をまとい、紺地金色笹模様広帯をしめ、紫色の長巾腰帯と白巾の請鉢巻をして白黒縦縞脚絆に白足袋をはく。

【行事継承の今日的課題】

コロナ禍の影響により、2018年(平成30)の開催以降2020年、2022年の2回の開催を見送り、2023年(令和5)の開催を実施したが、9月24日、宜野座ヌンドウルチ(ノロ殿内)の拝所で豊年祭の再開を祈願する「旗頭奉納」を催した。数年間の中断は、地域の人々の意識や記憶の後退と希薄化、さらには稽古不足による技量の低下が懸念された。1896年に始まったとされる宜野座八月アシビは1996年(平成8)に100周年記念を開催し、顕彰事業を実施した。コロナ禍の影響と隔年開催もあり、丸5年間開催できないことで、久しぶりの開催時には記憶の復元に多くの労力を使ったという。次回は2年後の2025年(令和7)の開催年になるが、開演130周年を検討するのであれば、2026年(令和8年)にまとめて開催してもいいのではないかと議論もできているという。宜野座区行事の最大のムラ行事である同行事は、約300万円の経費を要するという。経済面と約2ヶ月前からの練習があり、社会人にとっては仕事を終えて後の夜間の練習の段取りや立ち会い、当日へ向けての小道具整備や設営等の準備のための多くの時間と労力を必要とするため、二才団の関係者の大きな役割と負担なしでは行事が成立しないという。

3 今帰仁村湧川（ワクガー）の豊年祭の棒術

2002 年（平成 14）に沖縄県指定無形民俗文化財に指定されたのが「湧川の路次楽」（保存団体湧川路次楽保存団体）で有名であるが、湧川は今帰仁村の東部、羽地内海に面して位置し、村内最大の面積を誇り、甘蔗とパインを生業とする農村集落で、1975 年（昭和 53 年）発刊の『統計なきじん（創刊号）』によると、当時湧川の人口は 1,185 人（男性 577 人、女性 608 人）、世帯数 282 戸であったが、2024 年 8 月末現在の人口は 708 人（男性 369 人、女性 339 人）、世帯数 397 戸で約 50 年を経て人口が 4 割減少する一方で世帯数は増加する傾向がみられ、過疎化に襲われている。

【行事の概要】

行事名はホウネンサイ（豊年祭）と呼ぶ。毎年旧暦 8 月 10 日にトーカウガン（十日ウガン）を経て翌日の 11 日に豊年祭を行っていたようだが、同日が平日の場合は豊年祭は夜遅くまで行われるため、出演する児童生徒の就学に影響がでたようである。20 年ぐらい前（平成 14 年頃）から、就学児童・生徒への教育的配慮がなされ、トーカウガンを経ての最初の土曜日に豊年祭を開催することになったという。本来は、3 日間の開催であったが、過疎化等で 1 日のみで実施するようになった。

2024 年度は、当初は新暦 9 月 14 日（土）の予定であったが、同日最接近した台風 13 号の影響で 1 週間後の 9 月 21 日に開催された。夕方 5 時半から祭祀儀礼が始まり、7 時半から公民館野外ステージ前で棒術、路次楽をはじめとする豊年祭の舞台が演じられる。

豊年祭では、集落の人前で演じる前に、奉納の演武（舞）がある。まず最初に、集落西側の小高い丘の上に関係者がメースピヤー（前スピヤー）に列をなして移動し、その広場で棒術演武、路次楽、長者の大主（若衆・二才踊り）が演じられる。その一行は約 60 名。旗棒を先頭に、棒シンカ（49 名）、ロジガク（路次楽）（4 名）、長者の大主一行 9 名（ジカタ 4 人を含む）ある。その次にシシヤー（獅子屋）とよばれる獅子を安置する場所の前庭（7m × 7m）で同じように演武（舞）を行うが、メースピヤーとの違いは、ここでは最後にシシヤーから獅子を招く先導若衆の踊りとシシヤーから飛び出た獅子による獅子舞が披露される。獅子屋の入口は、安和岳（あわだけ）に向かっているという。いいつたえによると、安和岳には魔物住んでいるとされており、湧川の獅子が集落の守り神としてそれに対峙しているとされる。

日清戦争後、旧慣打破の風潮と経済的な負担過重などの理由により、明治 28 年から中止したが、明治 35 年に再開されたとされている。

【演武の種類と内容】

『湧川誌』（昭和 62 年）によれば、上のアサギにて、「スーマチ（総巻）」が行われる。「ボーカタ（棒方）、またはボーシンカ（棒シンカ）」全員が棒を斜め上下に振りながら広場いっぱい到大円陣をつくり、次第に二重三重と中央に向かって進む。円陣の中央に旗棒が達し、全員が一塊になると旗棒者による「ヒーヨーユイ」の音頭で、全員が「ユイ」の掛け声と共に飛び上がる。今度は反対に、中央の旗棒が四重五重の円陣の間を次第に外側へと出ていくとされる。

2024 年度の豊年祭でも、同様に屋外ステージの舞台右側の通りに赤組、白組に列をなし、赤の旗棒を先頭に白の旗棒が続き、赤白交互に反時計回りに円陣をつくっていく。数巡しながら、円陣を狭めて一塊になり、旗棒を掲げ、棒シンカも棒を掲げる。先頭の赤組の旗棒者による「ヒーヨーユイ」の合図で外側に飛び跳ねる。その次は先導者の赤の旗棒者が時計回りに再び円陣を描きながら行進し、数巡して塊になり、再び「ヒーヨーユイ」の合図で、赤の旗棒者は円陣から飛び出し、半時計周りに、また白の旗棒者は、時計回りに、それぞれの棒シンカが列をなし退場する。また、道沿いに最初同様に列をつくり待機して、紅白の鉢巻きをつけた二人 1 組の棒の演武を行う。同豊年祭では、スーマチ（総巻）の総員は 49 名であった。70 代の年配者から今年度初めて参加する中学 1 年生まで演武する。組棒は、紅白の鉢巻きをした棒シンカ 2 人 1 組で行う。最初は

紅白の三角旗をもつ旗棒から始まる。その後は、メーボー（前棒）7組、ナカボー（中棒）4組。シーボー（後棒）2組で棒の演武は終わる。シーボーが棒術がより難度の高い型である。湧川の棒は基本的には棒同士を合わすことはないが、最後のシーボーのみ、二つの棒が合わせる型がある。その後に路次が太鼓2人、ピー2人によって演じられる。一説によれば、スーマチ（総巻）は、一人の強力な武芸者を鎮圧する大衆棒の使い方が表現されていると言われている。『湧川誌』によると、昭和10年頃、津堅棒の名手と言われた北谷の桑江小タンメーが湧川の棒を観て、この棒は「クヌヌ手（棍の手）」であるから大事に保存するように言われたと記される（写真3-1-20～27参照）。



写真3-1-20 メーヌピャーの棒シンの円陣は旗棒を先頭に半時計廻りに1周半（手前の西側が正面になる）手前の黒胴衣が後尾になる。



写真3-1-21 メーヌピャーでの奉納棒は、ハタボー（旗棒）、メーボー、ナカボー、シーボーの10組が演武する。トリを飾るは旗棒をもつ二人のシーボー。湧川の棒は基本的に二つの棒を合わすことはないが、シーボのみは例外である。



写真3-1-22 メーヌピャーからシシヤー（獅屋）へ向かう一行



写真3-1-23 シシヤー（獅子頭を安置している場所）で半時計廻りに円陣をつくり、最初にハタボー（旗棒）を演武する。



写真3-1-24 屋外ステージ前庭へ入場する。赤の旗棒をもった者が先頭に半時計回りに円陣を描く



写真3-1-25 半時計周りに前庭を2、3周する状態



写真3-1-26 一塊になり棒を掲げるところ。



写真3-1-27 屋外ステージの前で棒演武のトリを担うシーボー（後棒）の2人。

【演武の組織と稽古・継承方法】

棒シンカの構成員は湧川区の男性で、2024年度は中学生4名～70代まで49名であった。『湧川誌』によると、旧暦8月7日にミヤイジャシ（庭出し）で予行演習が行われる。2024年度では2、3週間前から練習を始めたという。棒や空手着やタスキは、毎年使うために公民館で管理される。

【演武の衣装と道具・楽曲】

衣装は、市販の空手着で白胴着、白帯と黒胴着と黒帯の2種類である。どちらも赤いタスキを胸で×字になるよう背中で×字に蝶結びをする。また頭に赤組と白組にわかれるため赤と白の鉢巻きをつける。黒胴着をつける者は熟練者でシーボー（後棒）を演武する2組4人のみである。黒胴着の着ける者は旗棒を持つ者が先導役、棒を持つ者が最後尾を務める。戦後 1971 年に復活した那覇大綱曳行事の第1、2回の際に湧川の棒術、路次楽、獅子舞が那覇市から招待を受けたことを契機に、現在のような衣装の整備がされたという。それ以前はステテコであったようだ。当時、参加した嘉陽宗敬（76 歳／指導者）、当時を振り返って沖縄県庁から安里までの道ジュネー6か所で、湧川の棒術、路次楽、獅子舞を披露したという。その際に、現在のような衣装を空手着として整備したという。棒は、ガク、ドラ、太鼓の音に合わせた掛け声で演舞する。

【行事継承の今日的課題】

2021 年から 2023 コロナ禍で3年間豊年祭が実施できていない。指導者たちも演舞を忘れてしまうことが懸念される。2024 年からは、少し早めに豊年祭の準備を始めたいという。少子化で継承者不足が懸念されるため、高校生にも参加してもらうことで伝統文化の継承に努める。

4 本部町並里の八月アシビの満名棒

北部地区で唯一棒術の無形民俗文化財として市町村指定を受けているのが本部町並里区の「満名棒」である。1945 年頃には人口が1千人余もいて豊年祭では組棒が 37 組もあり、旗頭持、ブラフチャー（ボウ吹き）やハイヤーボンボン合わせて 80 人もいて、巻棒やゴーヤー巻もでき、イッチャイボー（五人棒）、打込棒などもあったようだが、1984 年の豊年祭では人口が3百人位に減少した。そのため組棒 10 組、部員も 25 名に減少した中で、先祖代々の遺産の継承のために、若い方々が集まり 1984 年9月に満名棒保存会が結成された。保存会では毎月1回集まって、失われつつある棒術の掘り起こしをおこなった。その成果が実り、1997 年に本部町指定無形民俗文化財（民俗芸能）として「並里の満名棒（三人棒）」が指定され、その保持団体として並里区村踊り保存会が認定された。

北部地域の例にもれず、集落の過疎化により、集落行事の縮小が顕著に表れている。参考までに 1980 年（昭和 53 年）発刊の本部町要覧『本部 MOTOBU' 80』によると、当時並里の人口は 303 人（男性 161 人、女性 142 人）世帯 95 戸であったが、2024 年5月現在の人口は 211 人（男性 110 人、女性 101 人）、世帯数 109 戸で人口は 30% 減少する一方で、世帯数は 14 戸増加し、一世帯あたりの人員が減少しつつある。そのような中でも、豊年祭は8年ぶりに開催され、集落外に居住するゆかりの人々によってにぎわった。

【行事の概要】

5年に1回開催される豊年祭。旧暦8月 11 日には、並里から伊野波まで道ジュネーをして伊野波神社に奉納することが恒例となっていたが、1955 年に伊野波においては、経済的その他の理由でこの道ジュネー、踊りとともに並里神社のみに奉納することになった。豊年祭の開催場所は公民館建物の後方が舞台になり、外側の広場に観客席が設けられ、舞台をみることができる。2024 年度は、2016 年以降8年ぶりの開催になった。本来は、2000 年に行う予定であったが、コロナ禍により中止になった。

元々、伊野波区の拝所の前にあったニーヤー（根屋）である財産家の上原家にあだ名を「ムリー」という武術に優れた人がいたという。若い頃首里松山御殿につとめていて、勤めのかたわらに空手や棒術の修行をしていた。勤めが終わり帰る途中、恩納村の富着に宿を取り暫く滞在するうち宿の娘と恋仲となった。ある日、地元の青年に二重三重に取り囲まれたが、「本部サルメー」の様に六尺以上も飛び上り、垣根を飛び越えて難を逃れた。また、伊野波の屋号幸地の高倉に火がつき人々が騒いでいる所に、「ムリーウッパー」が来て、倉のチニブ垣を蹴落とし、稲束を取り出して火災を逃れた事で評判になり、地域の人々から尊敬されたとい

う。彼は谷田原を開墾して、移り住み、そこで門弟を集めて武術を指導した。その中の一人がメーヌトンチ（前ぬ殿内）の「カミ（亀）ウンチュ」であり、さらに（故）玉城興盛に棒術が引き継がれた。その他にも伊野波の渡久地松太郎、戦前の大見謝医師も「ムリーウップ」の門弟であり、「かくり武士」がいたことが満名棒として継承されてきた伝来とされる。

【演武の種類と内容】

棒の種類は、三尺棒、四尺棒、六尺棒がある。六尺棒を自身の手に馴染むように加工し、黒色を塗ったりと自身の手に馴染むようにして、自身で保管する。

【演武の組織と稽古・継承方法】

豊年祭の開催には実行委員会が立ち上げられ、舞方と棒シンカによって練習が積まれる。8年ぶりの開催にあたり、1カ月前から練習をしてきたという。無形民俗文化財に指定され、棒術演武のとりを務める満名棒は、並里（屋号上殿内（ウントゥヌチー））三兄弟が務めた。

【演武の衣裳と道具・楽曲】

上下の白の空手着、紫の頭巾、脚絆に、紅白のたすきを胸前でX字にかけて、背中で蝶結びを行う。

【練習状況】

2024年度の豊年祭は、旧8月11日の1ヶ月前から練習したという。特に、タイボーや最も難度の高い満名棒とよばれるミッチャイボーは練習を行ったとされる。

【行事継承の今日的課題】

2000年の豊年祭のプログラムでは27演目の中で、4つの棒演目が含まれる。その次ぎが2004年後、2008年、2012年、2016年に豊年祭を行なったが、2020年がコロナ禍にあり中止され、本年（2024）が8年ぶりの開催になり、新暦の9月22日に開催した（写真3-1-28～33参照）。



写真3-1-28 並里公民館の後方が全面開いて舞台になる。



写真3-1-29 2024年豊年祭の舞台。



写真3-1-30 2016年の豊年祭の棒シンカのメンバー（当時）



写真3-1-31 並里の棒を代表する「満名棒」(三人棒) (2024年9月22日)



写真3-1-32, 33 ゴーリーティンペーの演武で使用するティンペーと呼ばれる盾の表裏。公民館で保管される。動物皮に黒漆が塗られ、持ち手もしっかりとしたつくりと2016年以来、復活した演武。

第2節 中部地区

沖縄本島中部地域における武術的身体動作を含む演武・芸能について、(1) 綱引きに伴う武術的芸能（棒術、相撲、空手、ガーエー）、(2) 棒巻、(3) 棒術、(4) 南の島、(5) その他の武術的演武・芸能に分けて、地域毎の特徴をまとめてみたい。

1 綱引きに伴う武術的芸能

沖縄本島中部地域では、夏季に幅広い地域で綱引きが行われている。綱引きに伴って武術的演武や芸能が演じられるところも多い。ここではその中で棒術、相撲、空手、ガーエーに分けて事例を紹介する。

(1-1) 綱引きに伴う棒術

ここでは、綱引き行事に伴って相撲が演じられる地域、またはかつて演じられていた地域について紹介する。

ア 西原町小波津の綱引きと棒

小波津区では、旧六月綱引き（チナヒチ）、旧七月盆踊り、旧八月十五夜「獅子又御願」、「七年まーる村遊び」（卯年、酉年）に棒を行う。棒のことを棒チカヤーという。綱引きの前に「一人棒」、「ハジリ棒」という組棒を演武する。盆踊りや八月十五夜には一人棒や組棒の演武を行う。毎年旧一月二日ハチウクシーと、旧八月十五夜の日に公民館前庭で青年（棒シンカ）により組棒を披露する。

場所については、綱引きは小波津集落中通りの三本ガジュマル前、盆踊り、獅子又御願、七年まーる村遊びは子初集落センター前広場、獅子又御願の御願は獅子屋で行う。

綱引きの目的は、五穀豊穡、地域子孫繁栄、防火のための「火返し（ヒーゲーシ）」である。盆踊りは、昭和37年頃にエイサーから盆踊りに変わった。踊りの合間に棒、獅子舞の演舞が披露される。八月十五夜「獅子又御願」は、無病息災、ムラの守護神である獅子に祈願する行事である。「七年まーる村遊び」は、豊年を祈願する行事である。昭和50年以来諸般の事情で途絶えていたが、平成14（2002）年に小波津伝統芸能保存会を結成し、平成17年（2005）に村遊びを復活させた。

王府時代には、主に士族や役人が演じていたという。小波津の棒の特徴は「ミーヒチャティ、クシイーチ」といわれ、鋭い眼光で重心を低くした迫力ある演武である。

旧六月綱引きに先立って、一人棒、ハジリ棒 が披露される。盆踊りでは踊りの合間に披露される。八月十五夜では厄払いと五穀豊穡、子孫繁栄を祈願して披露される。

小波津伝統芸能保存会（平成14年～）は、小波津在住者および小波津出身者で本会の趣旨に賛同するもの。保存会に、組踊部会、獅子舞棒術部会、三線部会を設置している。出演者はかつて八月十五夜においては棒術組として14～24歳の男子で行っていた（小波津誌より）。日本復帰後は、小学生から壮年まで男子が地域行事に出演している。今は小中学生女子も出演している。

稽古は、かつて八月十五夜アシビの2、3ヶ月前から練習した（小波津誌より）。近年は地域行事等の1、2ヶ月前から練習。コロナ禍前は、毎週木曜日に集落センターで小中高生に指導していた。稽古の場所は復帰後は指導者宅等で練習していたが、小波津集落センター落成（昭和58年）により、センターのホールになった。盆踊りの前は、櫓の舞台で練習する。

演武の構成は、ヤイ・ナジナタ（槍・長刀）、エークディー（樵手）、フーガキ、ウシワカ、チュイボー（一人棒）、タイボー（二人棒）、ミツチャイボー（三人棒）、ユツタイボー（四人棒）、トーディー（唐手）、ティンバー（盾・太刀と槍）、サイ、カマディー（鎌手）などがある。ただし現在、ウシワカ、トーディー、サイ、カマディーは継承されていない。楽器は三線（3～4名）と銅鑼1名、古老による指笛からなる。

イ 浦添市前田の綱引きと棒使い

前田区では、豊年祭（綱引きと村芝居）綱引きの後で「棒使い」と呼ばれる棒術を行う。旧六月に綱引き（綱引き後に棒使い、昼間）と村芝居（夕方から夜）が隔年で行われたが、近年村芝居は行われぬ。旧 6 月 25 日にムラを東村渠（アガリンダカリ）と西村渠（イリンダカリ）に分かれて東が雄綱（ヲンナ）、西が雌綱（ミンナ）を作って引いた。棒は「棒ツカイ」と呼ばれる。綱を引き終えたら、その後 1 時間ばかりの間に、ガーエー、旗頭持ち、棒、空手を順に演武した。戦前は旧 8 月 1 日から一日越しに踊りと棒を行った。10 日にメーアシビー（前遊び）、13 日、1 日 5、17 日がショウニチ（正日）という本番、18 日にアトウアシビー（後遊び）があった。

戦後途絶えたが、1965 年頃に復活した。浦添市でたこ祭り（1978 年）の一環での朱杖運が原動力となった。戦前は「巻き棒」も「配列棒」も集団演武として棒の花形で見せ所だったが、昭和 52（1977）年あたりから多人数での棒ツカイはなくなった。

令和 4（2022）年はコロナ禍で綱引きは 3 年連続で中止になったが、7 月 23 日（旧 6 月 25 日）に「綱引きウガン」として、集落内 16ヶ所を自治会三役など数名で回って祈願を行った。上演場所はメーシシモー（公民館の前庭）。戦後の現在の公民館（自治会館）建設前は、段差のある木々が茂る広場だった。その目的は、地域の発展、子孫繁栄、豊作祈願である。ウカンヌウトウイムチ（お神の御取り持ち）である。戦前までは棒術は数え 15 ～ 35 歳までの男子全員で行なっていた。当時は棒使いができないものは男にあらずの風潮があった。現在は 30 代の保存会メンバーが小学生（男女）20 人に定期的に公民館前で指導している。

保存会会員は 15 人程度で、指導は会長や数名の青年が行なっている。演武の構成は、かつては 20 種類あった。一人棒 5 種（略）、二人棒 4 種（略）、三人棒 1 種、巻き棒（マチボー）、フェーイ棒（集団棒使い）。しかし現在、保存会では一人棒と二人棒しか伝承していない。

衣装・道具については、空手着上下を使用する。頭には紅白 2 種類の鉢巻を巻く。マチボーや二人棒では赤白のはちまきを巻く。衣装の管理は会員個々が保管する。音楽はドラ鐘、フィーフィーという独特の指笛がある。戦前までは太鼓もあった。

ウ 西原町棚原の綱引き

棚原区の綱引きにおいて、旧 6 月 25 日のウファチヂナの時には「ウファチ」という女歌が歌われ、三尺棒と五尺の棒による棒術が披露された。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』p.211）

（1-2）綱引きに伴う相撲（角力）

ここでは、綱引き行事に伴って相撲が演じられる地域、またはかつて演じられていた地域について紹介する。

ア 宜野座村宜野座の綱引き

宜野座区では、綱引き終了後、平松毛において相撲が開始される。本土復帰の頃までは、相撲が翌朝まで続くことも珍しくなかった。また当時は対抗意識が強く、勝ち星の数で自組が不利になると寝ている者まで起こして相撲に参加させたという。現在は小学生・中学生・高校生・一般の部に分かれて 3 番から 5 番ずつ行われ、深夜 0 時頃に終了する。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』p.141）

イ 金武町金武の綱引き

金武区では、綱引きにおいてテービー合戦を行う。これは燃えている松明を頭より下がらないように火の粉を散らしながら押し合い、叩き合うもので、両軍向かい合っただけの示威行動である。綱引き終了後に角力大会（シマ）があるが、挑戦者が居なくなるまでの勝ち抜き勝負である。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』pp.148-149）

ウ 沖縄市大里の綱引き

大里区では、綱引きにおいて現在は子供の相撲を行なっている。昭和 50（1975）年頃から相撲になった。はじめは、大人同士の相撲であった。相撲を始める前は、棒術（ガーエー）が行われていた。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 p.167）

エ 沖縄市与儀の綱引き

与儀区では、綱引き終了後、アガリモウ（東の野）に場所を移して、相撲大会を催した。相撲大会には、近隣の集落（スニンジマ）の人も参加した。現在、相撲大会はない。

（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 p.170）

オ 宜野湾市真志喜の綱引き

真志喜区では綱引きの前に、コンベンション通りにおいて老人会、婦人会、子供会による空手、舞踊、力チャーシーなどが披露される。綱引きを公民館前の路上で行なっていた頃は、綱引きが終わってから、子供相撲や大人相撲があった。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 pp.188-189）

カ 西原町幸地の綱引き

幸地区では、綱引きの綱を引く前後のガーエーでは、主に青年ら（年配の男性や女性 1 人も参加）が飛び跳ねながら軽くぶつかる。棒は先端を持ち、もう一方の手で支えて他人に当たらないようにしなければならない。以前は綱引き後に角力があったが、現在はない。公民館で綱を丸めて土俵を作り中に砂を入れていたが、その後池を埋めた場所にホースで土俵を作り、数年前まで子供を中心に行われていた。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 p.201）

キ 西原町小橋川の綱引き

小橋川区では、綱引き終了後、公民館の前で子供相撲が行われる。終戦直後は組踊などもやったそうだが、現在は行われていない。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 p.206）

ク 西原町内間の綱引き

内間区では、以前は綱引きの時にイフの御嶽で子供達が相撲をしていたが、現在は行われていない。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 p.208）

（1-3）綱引きに伴う空手

ここでは、綱引き行事に伴って空手が演じられる地域、またはかつて演じられていた地域について紹介する。

ア 中城村新垣の綱引き

新垣区では綱引きにおける示威行為として男性がメーカタ（空手の型）を披露する。これは相手を捕まえて倒すことまではしない。かつては女性達も、チゼンを打ちながら歌を歌った。現在は行われていない。また上、下それぞれのトゥールバイ（灯籠張り）が壊れるまでぶつけ合う。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 p.178）

イ 旧北谷村桑江

旧北谷村桑江では、旧 6 月 24 日のカシチーの日に毎年綱を引いた。綱を引く前にはナカミチ（中道）で 10 分～ 20 分程、メンダカリ、クシンダカリの青年男性が互いに押し合ったり、棒を使ったりするガーエーを行なった。その時はテービー（松明）も使われた。興奮してテービーでもって相手の頭や背中を叩いたりす

ることもあったが、翌日には相手に労いの言葉をかけた。ガーエーで使う棒には、三尺棒と六尺棒があった。桑江には廃藩置県の頃に鹿児島県から移住してきた「ナカダのボンサン」と呼ばれていた方がおり、この方が三尺棒を使っていたようである。婦人たちがチヂンを打ったりすることはなかった。それで、綱引きが終わるとシマ（角力）をとった。

1937（昭和12）、38年頃の綱引きには、綱を引く前に、ドラガニの合図でメーカタ（舞方）が行われた。メンダカリ、クシンダカリのいずれかの青年が1人出てきて、相手を威嚇するようにメーカタをみせた。メーカタには、特に決まった型はなく、個々人によって上手下手があった。これに対して相手が出てくると、レスリングのように相手を倒すトーセーとなった。綱引きのメーカタの時にはドラガニで音頭をとるが、モーアシビ（毛遊び）の時には三味線に合わせて行なった。

メーカタで対戦相手が出てこなくなると、次にメンダカリ、クシンダカリの青年たちが互いにぶつかり合うシーチェーを行なった。仲村渠吉三さんがかつて先輩から教えていただいた相手にぶつかる方法は、左手を曲げて自分の胸を守り、左の方から二の腕で相手にぶつかる。そして右手で相手を叩くという。メーカタやシーチェーには、字内の男性が参加し、他字の者は参加しなかった。テービーを使って綱引き場を明るくしていたが、時にはテービーでもって相手を叩くこともあった。綱引きを終えると、ンマイー（馬場）に場所を移し、他字の人も参加してシマ（角力）が行われた。（『北谷町の綱引き』 pp.162-163）

ウ 旧北谷村北谷

旧北谷村北谷では、旧6月25日のカシチーウユミに綱引きを行なった。これは昭和13、14年ころまで毎年行われていた。綱引きに使われた楽器はドラガニでメンダカリ、クシンダカリに各一個ずつあった。綱引きが終わると、その場でメンダカリ、クシンダカリ双方が「サーサーガーエー」と言ってシーチェー（押し合い）を行なった。シーチェーはメンダカリ、クシンダカリ、あるいは男女関係なく入り交ざって「サーサーサーサー」と叫びながら背中や腕を使って押し合う競技であった。

これが終わると、メーカタ（舞方）が行われた。このメーカタには、先のサーサーガーエーとは異なり腕力のある青年男性が参加した。メンダカリがクシンダカリに対して、クシンダカリがメンダカリに対して意地を表す競技であった。青年男性が出て空手の型を相手に示した。これをメーカタと言った。型は特に決まっておらず、個々の型を披露した。そのため上手な人、下手な人がいたようである。型の囃子は「タチミソリ、メーカタ・・・」などと三味線のリズムに合わせて歌を歌ったりすることはなく、ドラガニを使った。そして「トー、ナイシガ ウラ ンジレー」と言って相手を誘い出した。相手が「トー、クレーワーガ ナイン」と思っ出てくると、組み手となり、相手を倒す勝負となった。これをトーセークルバセーといった。メーカタとトーセークルバセーを含めて、メーカタと言った。このトーセークルバセーは、相手を転ばした時点で勝負はついたが、メーカタの型を示した後に必ず行われるわけではなかった。例えば相手側から自分より年齢の離れた年配者が出てきた場合などには、お互いにメーカタの型を披露するだけで、そのまま退場することもあった。メーカタの周囲を円になって取り囲んで見物し、誰も双方の加勢には加わらなかった。このメーカタで勝つことは名誉なことだった。メーカタは、綱引きだけに行われるのではなく、モーアシビ（毛遊び）にも行われた。この時は歌や三味線のリズムに合わせてメーカタをし、そのままトーセークルバセーが始まった。（『北谷町の綱引き』 pp.167-168）

エ 旧北谷田野里

旧北谷田野では、例年の綱引きは旧6月24日のカシチーウユミの日に綱を引くカシチージナであった。毎年の綱引きは昭和12（1937）年に廃止となったが、昭和30（1955）年に野里共進会によって復活された。二度にわたる綱引きが終わると、勝利した側は一番カニチをはずして、メージナをみんなで担いだ。その際には「ワワワワワ、サー、ファイ、ファイ、ファイ・・・」と掛け声を出し、ドラや太鼓を叩いた。綱の上には

シタクとして、踊りの上手な者と空手のできる者が乗って踊ったり、空手の型を披露したりした。

次にテービー（松明）でもって相手と叩き合うムンドー（ガーエー）となった。このガーエーには、青年男性をはじめ、年配者も参加した。時には女性同士のムンドーもあったようである。青年男性によるガーエーは、テービーで叩きながら押し合うもので、中にはテービーを持って向かってくる者からテービーを奪い取って逆に打ち返す者もいた。テービーの熱で周囲の木の葉が無くなったという。（『北谷町の綱引き』 p.185）

（1-4）綱引きに伴うガーエー

ここでは、綱引き行事に伴って身体をぶつけ合うガーエー（競い合い）が行われる地域、またはかつて行われていた地域について紹介する。

ア 恩納村谷茶の綱引き

谷茶区の綱引きでは、ガーエーという男性による身体ぶつけ合い、倒し合いがあり、その様子は喧嘩のようである。これにも勝敗があり、最近では綱引きで負けた側を勝者とし、公平にお互いが気分よく終われるよう配慮している。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 p.145）

イ 金武町金武の綱引き

金武区の綱引きではテービー合戦が行われる。これは燃えている松明を頭より下がらないように、火の粉を散らしながら押し合い、叩き合う。両軍向かい合っただけの示威行動である。綱引き終了後に角力大会（シマ）があるが、挑戦者が居なくなるまでの勝ち抜き勝負である。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 pp.148-149）

ウ 与那城町屋慶名の綱引き

屋慶名区では、昭和 47（1972）年綱引きのときには、綱の示威行動・道ズネーの後、相対した綱の前で東の棒と西の棒がそれぞれ 1 回ずつ演じられた。

棒が使われた場所で今度はヤーサイモーが行われる。ヤーサイモーイとも言う。参加者は男達である誰でも参加できるものであるが体力が必要とされる。昭和 47（1972）年の場合、東と西の若者達がワツショイ・ワツショイとかけ声をあげながら押したり離れたりするのを 4～5 度繰り返した。これは双方が押し合うものである。その間、2ヶ所から放水が続いた。1ヶ所は若者達の横から、もう1ヶ所は屋根の上からである。放水しないと押し合う力が強い為に体力が続かず倒れてしまうということであった。水道の普及する前はバケツに汲んで押し合いしている若者達にぶっかけたという。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 p.42）

エ 勝連町平敷屋の綱引き

平敷屋区の綱引きでは、会場の平敷屋小学校グラウンドに到着後、青年達によるヤーサイ（押しくらまんじゅうのように押し合う）が行われる。東西の青年が出てきてぶつかり合う。双方のぶつかり合いの頃合をみて、周りで見ている男性が水をかけると、ヤーサイを終える。それを 2、3 度繰り返す。一方では、女性達による綱引き歌が歌われる。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 p.161）

2 棒 巻

ここでは、綱引きとは別に棒巻が行われる地域について紹介する。

ア 北中城村島袋の棒総巻

島袋区の棒総巻は期日は決まっていない。村遊びの中で行うので、毎年行われることはない。また大きな行事の時に行う。由来は約二百年前、首里西の平の仲村親雲上が伝えたといわれている。昭和 16(1941) 年以来途絶えていたが、昭和 39(1963) 年に古老の記憶により復活させた。これまで、昭和 3(1928) 年昭和天皇即位式、昭和 15(1940) 年の紀元 2600 年祭、昭和 24(1949) 年龍の仕立て祝い、昭和 53(1978) 年第 1 回北中城村文化まつり、平成 21(2009) 年・平成 29(2017) 年島袋まつりで行われた。

継承組織としては、島袋民俗芸能保存会を中心に青年会、壮年会が協力して継承している。指導は保存会会員が行い、参加人数は 50 名程度である。島袋民俗芸能保存会は「赤木名節」および「棒総巻」を保存し、その普及と後継者育成を目的とする団体である。

演武は、奇数組、偶数組が一行縦隊になり会場内を二手に分かれて周回する。総巻きとハジリ棒と呼ばれる組み手で構成される。中央付近で交差する時、右側縦に構える棒下方を互いに相手側に出して棒を当て合う。楽器はホラ貝約 4 名、大太鼓 1 名、ドラ鐘 1 名、鉦子約 3 名が連打する。

3 棒 術

ここでは綱引き行事とは別に棒術が行われる地域について紹介する。

ア 嘉手納町野里の野里棒

野里区には二人一組で行う「組棒」と「一人棒」があり、六尺棒と三尺棒を用いる。元々は旧八月に行われていた村芝居で演じられていた芸能である。現在は一般財団法人嘉手納町野里共進会により団体が主催している行事のほか、町内外で行われる芸能祭などで披露する。約 2 ヶ月前から練習を始める。その特徴は一人棒の打ち込む気迫や、組棒の二人が打ち合う姿は真剣勝負そのもので圧巻である。野里出身の男性のみで行う。

その由来は、首里から野里に住み着いたタルガニーヌメーという人が農業の振興を図る上で若者を部落にひきとどめる必要があると考え、「道イリク」と「棒術」を習ってくるよう命じたのが始まりと言われている。

技の継承については、戦後、戦前に演武を経験していた野里出身者に演舞の仕方や演奏、衣装について聞き取り調査を行い復活させた。一般財団法人嘉手納町野里共進会により 49 組のうち 11 組が継承されている。地謡はボラ 2 名、ドラ 1 名、太鼓 1 名、三線 3 名で構成される。

イ うるま市田場の棒

田場区では、豊年祭（十五夜）その他に旧盆行事（ヒチグワチ）、新年会、夏祭りがある。豊年祭（十五夜）で棒の演武を行う。ティンバーの手 ナギナタの手、エークの手、対面での打ち合いをヌンドウンチ（祝女殿内）神屋にて行う。由来は、いつ伝わったか定かではない。村の繁栄、豊年、厄災ばらいとして獅子舞と一緒にヌンドウンチへ奉納される。十五夜祭はおよそ 100 年続いている。コロナ禍の影響で 2 年間は観客なしで奉納のみ行った。出演者は 20 代前半から 50 代までが務める。

演武としては、露払いで棒の手（独演型、棒対棒）、ティンバーの手（ティンバー対槍）、ナギナタの手（ナギナタ対槍）、エークの手（櫓対トウザー：三叉鉾）、獅子舞の順で構成される。棒の手（独演型）はクーサンクーのような演武線になっている。

道具は、2022 年に市の補助（約 80 万円）を受けて新調した。武具の刃の部分は町工場に作成させた

金属製である。法被なども手縫いで自作した。楽器としては金鼓隊（大太鼓、締太鼓、ちょうぐ、三線、銅鑼、ボラ）で構成している。楽曲は多幸山（あっちゃめ一小）を用いる。

ウ 読谷村座喜味の座喜味棒（ザチミボウ）

座喜味区では、棒の演者はボウチカヤーと呼ばれ、棒術の前にスーマチ（棒巻）を行う。棒は型の演武、対面の打ち合い等がある。戦前は旧 7 月 16 日、8 月 15 日、9 月 9 日にアシビが開かれた。現在は 9 月敬老会、12 月総合共進会で演武が披露される。戦前のアシビは二才頭（ニーサーガシラ）が区長に掛け合い、開催許可を得る慣わしだった。開催が決まると、ムスビーといって豚を潰して会食し、練習を始めた。ある程度仕上がるとアシビナーでスーダチグラーと称する公開練習を行い、旧 9 月末の最後のアシビとなる「別れアシビ」を盛大に催した。

座喜味棒の由来については、500 年の歴史を持つといわれるが、何らかの理由で途絶えた。近代の復活は明治 13（1880）年頃 山城平三氏が 15 才の時に津堅島出身の「つぼやのタンメー」と呼ばれる炭焼き老人から習得したといわれる。戦前の棒チカヤーは青年（15 ～ 25 才）が中心だった。現在は、青年を中心に 16 ～ 65 才までが構成員となっている。

スーマチは演舞者全員によるスナーで、公民館広場で行われる。メーボー（前棒）とクシボー（後棒）に分かれ、スーマチヌユイアシと称する行進を行う。西に親旗頭、東に子旗頭が立ち、それを中心にブルマチと称して渦を巻く。その後、本番のユイアシ（ゆい合わせ）を経て、棒術が演じられる。鳴物はホラ貝、太鼓（大小）、鉦、指笛を打ち鳴らす。

棒の演武の型は 11 種類ある。棒は六尺棒を基本とし、三尺棒も使用する。棒は県内の守礼堂にて入手している。衣装は以前はクルチナー（黒着物）縄帯を締めて裸足で演じた。現在は紺色系統の上下に読谷花織のウッチャキを着用、ミンサー帯を締めている。

エ 読谷村宇座の棒

宇座区では、棒は旧 7 月 16 日のウークイにエイサーのつなぎに演武する。青年会が中心となる。またジューグヤー（旧八月十五夜）には組踊、舞踊と組み合わせて演武する。伝統芸能保存会が中心となる。型の演武、対面での打ち合いがある。区内拝所、宇座山内楊姓門中、主ヌ前殿地、公民館中庭の順序で演武してゆく。

その由来は宇座誌『残波の里・第一巻』によると、西原間切の豪傑ウチャートーマグラーが読谷山按司家（護佐丸）と親しく、マグラーの棒術が宇座棒の元祖ではないかといわれる。戦前は旧 7 月 16 日盆踊り、旧 8 月 15 日観月会の 2 回アシビを行った。その際、組踊、舞踊などと共に棒術も披露した。戦後途絶えていたのを昭和 35（1960）年頃から徐々に復活した。旧 7 月 16 日盆行事、旧 8 月 15 日観月会も復活した。

運営については宇座区伝統芸能保存会、青年会が運営している。中高生、現役青年会（18 ～ 25 才）、30 代が演舞者である。練習は行事の 3 ヶ月前から週末の稽古が公民館敷地内外で始まる。棒の型は ヒーボウ、ウシワカ、ウドウイボウ、クシワイの 4 種類を 2 組が順に繰り返す。使用楽器は鳴物 ホラ（貝）、ドラ、大太鼓・締め太鼓である。カリー太鼓は青年たちが務める。楽器演奏は演者が行う。

オ 読谷村波平のハンジャ（波平）棒

波平区ではハンジャ棒を、旧 7 月 16 日（盆行事）、八月十五夜アシビ（波平観月会）に演じる。14 種の組棒（組手）が継承されており、ハンジャ棒、エイサーと組み合わせて演武する。上演場所は、波平東門、アシビナーである。令和 2・3 年度はコロナ禍で中止したが、令和 4（2022）年度から盆行事、観月会を開催した。

その由来については、約 290 年前、津堅アカナーという若者が波平に奉公し、棒術を伝えたと言われる。「津堅手」は 2 人三尺棒である。行事の中での演舞は、ヤイ棒を先頭に列をなして棒チカイ、エイサー共に東門

に向かい、スーマチ（総巻棒）で旗頭、大畑、小旗を走り回り邪気を払う。

伝承については、波平区伝統芸能保存会により継承されている。子ども棒術クラブもあり、保存会の青年たちが指導にあたる。演武者は小学1年生～35才までの約70名。

棒の型は、ハンジャ棒に14種ある。2人三尺棒（3種）、2人六尺棒（3種）、2人三尺六尺（8種）がある。鳴物は勝負鉦、太鼓、鉦、ブラ（ホラ貝）である。

カ 読谷村長浜の長浜棒

長浜区の長浜棒は役員歓迎会、敬老会、生年合同祝にて演武を行う。最近では令和元（2019）年1月に亥年生年合同祝が行われた。その由来は、琉球国時代、御殿勤めをしていた山内ウメーが「赤坂棒」、「山内暗夜」を人々に指導した。明治時代には津堅島から津堅繁多小ウスメーが「津堅棒」、「砂力チ棒」、「カジチリ棒」を伝えた。また浦添から浦添カントーが「浦添小湾ディー」を指導した。

継承のための組織としては、長浜伝統芸能保存会（自治会長が会長）において棒術部長がまとめている。男性自治会員であれば誰でも出演が可能である。催し物や出演依頼があれば、2ヶ月前から週2回程度練習を行う。

演武構成は、グーヤー巻（集団演技 左巻円陣→右巻に円陣を解く）、長刀2人「先ふい」、その後13組の組棒演技、最後にホラ、鉦、スリー太鼓で終了する。

鳴物は、ドラ、鉦、太鼓、ホラ貝で構成される。

キ 北谷町下勢戸の棒術

下勢戸区では、生年祝いのカジマヤー（一般的には旧9/7）の他、祝賀行事や出演依頼の際に棒術を演武する。下勢頭郷友会では、チンク（金鼓）隊と棒術の呼び方がある。2人一組の組み手（組棒）を複数組が順番に行う。六尺棒を使用する。

棒術は昭和46（1971）年に下勢頭で初めてカジマヤーを迎えた方の祝賀行事として行われることになり、読谷村波平のハンジャボーを教わった。指導を受けたのは8名である。元の波平ハンジャボーの由来は、約290年前、津堅アカナーという若者が波平に奉公し、棒術を伝えたとされる。また一説として津堅島の棒術は、ペークーガマに隠遁していた津堅親方に唐手と棒術を学んだという伝承がある。

伝承の組織は戦後、字下勢頭会から昭和30（1955）年に下勢頭部落会となり、下勢頭郷友会が昭和51（1976）年に下勢頭芸能保存会を結成した。出演者は、棒は基本的に青壮年が担当する。子供の場合は型を演武する。練習は現在、本番の2、3ヶ月前から行う。

演武の構成は、カジマヤーの祝賀行列ではチンク隊（ボラ法螺、ソーグ鉦、テーク締太鼓・大太鼓）の次に隊列を組んで行進する。七箇所十字路で披露する。楽器はボラ（法螺）、ソーグ（鉦）、テーク（締太鼓・大太鼓）を務める。演奏者数は流動的である。

ク 北中城村大城・荻堂の旗スガシー

大城区と荻堂区の合同行事である旗スガシーはチョーデーボー（兄弟棒）とも言われる。荻堂自治会と大城自治会代表による約束組棒（兄弟棒）である。演武は旧7月17日に行われる。令和4（2022）年度は旗スガシーが中止となり、拝所でウガンを実施した。以前は喧嘩棒と呼ばれるほど真剣に対決し、アザができるほどであった。現在では型と約束棒となっている。

練習は平成22（2010）年頃から、地域の空手家から指導を受けて10日間練習する。演武としては一人棒（個人形）、二人棒（約束組棒）がある。楽器はドラ鐘と指笛を使う。

4 その他の武術的演武・芸能

ここでは、その他の武術的身体動作を含む芸能・演武が行われる地域について紹介する。

ア 北中城村島袋の「赤木名節」

島袋区の「赤木名節」は、琉球国時代から伝わる二才踊りで、1番～4番までの振りは空手の異なる受けの型を取り入れている。演武の機会は1月新年会、9月敬老会、10月島袋まつり、北中城まつりなどである。その由来は、比嘉巖（大正12年生）によると、首里の踊奉行から各地のシティ（上手な人）たちが習ってきたという。

伝承としては、戦後しばらく途絶えていたが、昭和53（1978）年北中城まつりへの出演をきっかけに復活した。2人1組での演舞から世代交代で踊り手が3名から6名の踊り手になった。現在は島袋民俗芸能保存会（会員15人）で継承している。楽器は、地方6名が務める。

イ うるま市与那城のジューグスージ

与那城区では、旧1月2日に行われるジューグスージ（15歳祝い）において、空手の方を真似て各自創作の型を演武する。場所はヌンドウンチ（ノロ殿内）隣接のノロ御殿前（屋外）である。数え15歳の男子が対象となり、成人と看做す通過儀礼として行われる。各自が空手の方を真似たもの（各自のオリジナルをコーサンクーと呼ぶ）を関係者の前で披露する。ただし空手のコーサンクーではない。平成23（2011）年から少子化の影響で中断している。伝承組織は、昔は宮城自治会だったが現在は各家庭単位である。上原区、池味区や伊計区でも同様の行事があり、桃原区へも伝わった。

※文献名を記していない事例については、「令和3～4年度沖縄空手ユネスコ登録推進事業学術研究連絡会」による調査資料に基づいている。

著：久万田 晋

第3節 南部地区

1 詳細調査報告① 南城市玉城仲村渠綱曳き

【行事名・開催日・開催場所】

令和6年度の「仲村渠綱曳き」は、8月3日（土）（旧暦6月29日）午後7時から開催された。後述するように、仲村渠綱曳きは毎年旧暦6月25日におこなわれるアミシ御願の後におこなうのが本来の姿であったが、なるべく多くの参加者が集まるように、近年ではアミシ御願実施後の週末に開催されるようになっている。開催場所は仲村渠児童館前の広場である。児童館の後方は高台になっていて、そこには「ニードゥクル」と呼ばれる拝所が存在する。

仲村渠集落では綱曳きの綱を毎年作り替えており、綱曳き開催予定日の2週間前の週末に、住民総出で綱編みがおこなわれる。綱を編むための藁の一部には、仲村渠の稲作を復活させようと、近年青年達を中心に結成された「稲作会」が栽培した稲藁が用いられ、足りない分の稲藁は金武の農家から購入している。綱曳き終了後の綱は、志喜屋集落に譲られるという。

【関連祭祀儀礼】

仲村渠綱曳きに先だってはアミシ御願がおこなわれる。仲村渠集落の南側には浜川御嶽、受水走水、エーバンタ嶽、藪薩御嶽等が点在する「藪薩の浦原」と呼ばれる一大聖地集中地となっている〔湧上一九七七：三七～三八〕。また集落内や周辺にも、アサギの神屋や奥武の殿やミントングスクといった拝所や、クダカガーや番屋ヌカーといった井泉が多く存在する〔玉城村字仲村渠祭祀委員会編 一九九〇〕。まず午前5時頃に、区長が山開けの鐘を鳴らす。そして午後2時頃、村の有志が児童館に集まり、青年の組と壮年の組に分かれて上記の聖地や拝所や井泉を巡拝する。多くの聖地や井泉を巡拝するため、1時間半～2時間近くかかる。巡拝を終えると、一行はニードゥクルに集まる。現在のニードゥクルは一坪ほどのコンクリート製の小さな社の中に香炉が置かれているだけであるが、戦前は、石積と草葺き屋根でできた3坪ほどの建物で、その中に半球状の石と火ヌ神が祀られていたという〔玉城村字仲村渠祭祀委員会編 一九九〇：六〇〕。ニードゥクルの前に、綱曳きの際に用いる法螺貝や銅鑼、金鼓（チンク）、小太鼓、棒などを並べ、全員でニードゥクルを拝む。その後、ニードゥクル前の広場に藁を敷き、その上に上記の楽器を並べて、上組、下組それぞれが、使用する楽器を選ぶ。これは良い音の出る楽器を選んで、ガーエーの際に有利になるようにするためだという。楽器が決まると、楽器担当の者は楽器を、棒担当の者は棒を手にして、囃しながらミントンの神屋に向かう。神屋に到着すると、神屋の庭で円になって、棒を振り楽器を打ち鳴らしてガーエーをおこなう。ガーエーの後、ミントンの神屋を参加者全員で拝んで、儀礼は終了する。その後、夕方から綱曳きとなる。

【棒の材料と演舞の種類】

棒の材料については不明。演舞並びに棒術の出番については、以下、綱引き行事の流れに沿って記述していく。

夜7時頃、全体ガーエーが始まる。全体ガーエーは、楽器を持った壮年たちが一列、棒を持った青年たちが一列になり、二列が向かい合う形でおこなわれる（写真3-3-1）。壮年たちが法螺貝や銅鑼、チンク、太鼓を打ち鳴らすと、青年たちが棒を体の正面に垂直に立てて回しながら、「スイヤースイ」と応じるというのが基本のかたちとなる。そのうえで、時々演奏の調子が変わり、楽器を持った壮年たちと棒を持った青年たちが中央に集まってより高く楽器と棒を掲げてながら「サー、サー、サー、サー、サー、サー、サー」と囃し合う。演奏のリズムをとったり変調のタイミングを操るはチンクの役目であり、それだけ難しのために、「チンクを持つ人が花形だ」と言われている。この際のガーエー棒は動作も単純で簡単なため、希望者であればだれでも参加できる。30分ほどガーエーを続けた後、今度は女性たちが楽器の列と棒の列の間に入ってくる。女性たちは

手に小太鼓を持っていて、楽器に合わせてそれを叩く。太鼓を持たず手踊りをする女性もいる。そうして計1時間ほど全体ガーエーがおこなわれる。

全体ガーエーの後には、棒術の演舞がおこなわれる。演舞のための特別な舞台はなく、先程全体ガーエーがおこなわれていた場所でおこなわれる。演舞はまず、上組・下組それぞれ3人ほどが出てきて一列に並び、全員で動作を合わせて同じ型を披露する。その後、上組、下組の演者が交互に出てきて、型を披露するかたちでおこなわれる(写真3-3-2)。型は4つあると言われているが、それぞれに特別な名前はついておらず、「一番の型」「二番の型」などと呼ばれている。仲村渠の棒術は全て個人が一人で演舞するかたちで、複数人が向かい合って実際に棒を打ち交わしたりすることはない。

棒術演舞の後には、スーマチ棒がおこなわれる。このときは小学校高学年～30代くらいまでの男性が一斉に参加し、総勢20人ほどの人数になる。児童館前の広場の東側と西側に上組と下組の旗頭がそれぞれ立てられ、その周囲を棒を持った青年たちの列が周回したり渦を巻いたりしながら行進する(写真3-3-3)。スーマチ棒の際には、人がすれ違う際に棒の下部分をわざと当てて音を出す。スーマチ棒の最中にも銅鑼、チンク、太鼓が打ち鳴らされ、全体のリズムを取る。

スーマチ棒が終わると、上組・下組の青年たちと旗頭そして住民たちは、それぞれの綱が置かれている広場の東側と西側に移動する(東側に上組の綱、西側に下組の綱が置かれる)。青年たちは旗頭を囲み、棒を体の正面に垂直に立てて回しながら、楽器の音色に合わせて再びガーエーをおこなう。

ある程度ガーエーがおこなわれた頃に、テービー(松明)に火が付けられる。テービーを持つのは、ある程度年をとった男性の役割であるという。青年たちと住民たちは自分たちの綱を担いで広場の中央まで綱を運ぶ。この時、ただ綱を運搬するだけではなく、法螺貝や銅鑼、チンク、太鼓を持った人々が先頭に立って楽器を打ち鳴らし、そのリズムに合わせてながら行進がおこなわれる。テービーはさらにその先に立って、行列の行く先を照らす役割を果たす。広場の中程に差し掛かったところで、上組・下組それぞれから1名ずつ青年が出てきて、行列の前で棒術の演舞を披露する。さらに行列が進んで広場の中央まで来たところで、改めて上組・下組から1名ずつ青年が出てきて、広場に書かれた中央線を挟んで向かい合って棒術を演舞する(ただしこの際も棒を打ち交わすことはしない)。

棒術演舞が終わると、いよいよ綱曳きとなる。上組・下組双方が綱を中央に運ぶ。このとき、双方の青年たちは棒を使って綱の頭を上げて接合しやすくする(写真3-3-4)。雌綱の頭部に雄綱の頭部が通され、カナチ棒が挿入されて綱の接合が完成するやいなや、区長の号令で一斉に両側から綱が引かれる。勝負はだいたい1分ほどで決する。勝負が決まると、勝った側の青年たちは円になって棒を突き上げながら、氣勢を上げて勝利を祝う。その周囲では壮年たちが楽器を打ち鳴らして囃し、女性たちは小太鼓を叩き手踊りして歓びを表現する。綱曳きは2回おこなわれる。

綱曳き行事の最後には、カナチ焼きがおこなわれる。綱の頭部の一部を切り取って、数人の青年たちがそれを持って集落の西に向かって歩いていく。集落の西の外れまでくると、そこで切り取ってきた綱の頭部の一部をテービーで焼き捨て、泡盛を献げて手を合わせて拝む。こうして綱曳き行事は終了する。

【由緒・来歴】

仲村渠の棒術は、メーカタ棒に由来があるという。元々は大城マサさんという男性(明治33年生)が、字玉城の屋号ミーヤという家からメーカタ棒を習ってきて、祝いの席などで演舞していたという。それが今から30年ほど前に、継承者を育成しなければならないという声上がり、それならば綱曳でも棒術を披露しようということになって、綱曳行事の中に取り入れられたという経緯がある。さらにその後、綱曳行事の中にスーマチ棒が取り入れられたという。ちなみに現在でもメーカタ棒は継承者の青年たちによって、敬老会などの場で披露されている。

【棒組の構成員】

綱曳き行事の中では上組・下組の区別があり、それぞれの組に所属する青年が別々に棒術を披露することはあるが、これは集落内のメンバーシップに基づく区別であって、それ以外に特別に「棒組」というものは存在しない。区別があるとすれば、メーカタ棒を習得して棒術演舞や棒術指導の際に主導的役割を果たす継承者の青年と、継承者の青年から手ほどきを受けて綱曳き行事などの当日のみ演舞を披露する一般の青年という区別である。

【棒の衣装・演舞時の音楽】

衣装は、白い長ズボン（特に指定は無く、白っぽいズボンであれば何でも良い）に、区で作った揃いの長袖Tシャツを着る。そして紫色のタスキを締める。頭には上組は赤、下組は白の鉢巻きを締める。綱曳きでの棒術演舞の際に音楽の演奏はないが、後述のメーカタ棒の際には唄三線が演奏される。

【練習状況】

綱曳きの際の棒術演舞に参加する一般の青年は、綱曳き開催予定日の一週間ほど前から数回、児童館前の広場において、メーカタ棒継承者から指導を受けながら練習をおこなう（写真3-3-5）。スーマチ棒に関しては、基本的には列の前の人の動きに追従していけば良いので、事前の練習は特におこなわれない。

メーカタ棒継承者の一人の男性によると、メーカタ棒は唄三線に合わせる必要があるため、習得が難しいのだという。そのためきちんと型を習得している継承者は、各世代に数人ずつしかいない。継承者の青年は、先輩の継承者の青年から指導を受けたり、ビデオを参考したりしながら練習をおこなっているという。この練習は不定期である。

【コロナ感染症等をはじめ行事継承の今日的課題】

仲村渠集落の世帯数および人口は、令和6年6月現在で106世帯219人となっていて（南城市ホームページ）、南城市の中でも人口の少ない集落の1つに数えられる。背景には過疎化と高齢化があるが、その理由の一つは、働き口を求めて集落外に出て行った若者が結婚などを契機に現地に居を構えそのまま定着してしまうことがあるという。現在40代のある男性は、6人いた同級生のうち、集落に残っているのは自分一人だと語る。そのため、毎年の綱作り作業のための人員を集めることが年々難しくなっており、また、仕事や学業の都合で棒術の練習に参加する青少年が減少してきて、綱曳き行事で棒術を披露する演者を確保することにも苦労するようになっている。こうした困難な状況は、2020～2022年の3年間、コロナ禍のために綱曳き行事が中断されて以降、ますます顕著になっている。

一方で好転の兆しも見えている。数年前から、集落の北東側にある区所有の土地を住宅地として分譲し始めたことによって外部からの移住者が増え、仲村渠の人口は最近はある一定数を維持することに成功している。そうした移住者は若い夫婦である場合が多く、子ども連れで移り住んでくることで、集落の若返りにも寄与しているという。そうした移住者の人々が、元住民との関係構築のため、あるいは子どもたちを楽しませるため、積極的に綱曳き行事の準備や実行、行事の現場に参加するようになっている。最近仲村渠集落の外れにオープンしたインド料理店の外国人従業員たちが全体ガトーエーに参加するということもみられた（写真3-3-6）。移住者と元住民との関係構築の場という新たな機能が、綱曳き行事に生じてきている。同様に、様々な理由から集落を出ていった元住民たちも、綱曳き行事に合わせて帰ってきて、当日の全体ガトーエーやスーマチ棒に参加したり、踊り手や観客として行事を盛り上げたりするなど、行事成功のために欠くべからざる存在となっている。その意味では仲村渠の綱曳き行事は、集落から出ていった元住民と現在集落に住んでいる元住民同士の繋がりを維持する役割を果たしているとも言えるだろう。



写真 3-3-1 網曳き前のガーエー



写真 3-3-2 棒術の演武



写真 3-3-3 スーマチ棒



写真 3-3-4 雄網・雌網の接合



写真 3-3-5 棒術練習の様子



写真 3-3-6 全体ガーエーに参加する移住者の人々

著：神谷 智昭

【引用文献】

玉城村字仲村渠祭祀委員会編 一九九〇『ミントン』 仲村渠祭祀資料No. 1 玉城村字仲村渠
湧上元雄 一九七七「「藪薩の浦原」考」『琉球大学法文学部紀要』第二一号 琉球大学法文学部
南城市ホームページ (https://www.city.nanjo.okinawa.jp/shisei/jichikai/tamagusuku/nakandakari/)

2 詳細調査報告② 八重瀬町字富盛

【行事名・開催日・開催場所】

八重瀬町字富盛の棒術は、2023（令和5）年10月1日曜日に富盛公民館前通りと隣接する広場で十五夜行事にて演武された。十数年前までは、平日であれ旧暦8月15日に合わせて行っていたが、現在は旧暦8月15日直後の日曜日に開催している。富盛の十五夜行事の特徴は、集落を南（フェー）と北（ニシ）に2分し、それぞれの出し物として演目が繰り広げられる。舞踊については現在も南北で分けて演目を展開するが、棒術は南北がひとつになり、公民館前広場にて演武と棒巻が行われている。戦前は、南の棒人衆は勢理城に集合し、棒術の演武を奉納してから祭りに参加するしきたりになっていた。

【関連祭祀儀礼】

八重瀬町字富盛の旧暦8月15日の八月十五夜行事である豊年祭（17世紀頃）の中で演じられる演目には唐人行列・大和人行列（いずれも町指定文化財）がある。その起源は不詳ながら口伝では17世紀頃から十五夜で踊られていた。豊年祭は村の豊作を祈願し行われる。北と南の各出発場所から旗頭、金鼓隊、棒術衆、シタク、芸能衆、女行列の順で隊列を成し豊年祭の遊び庭を目指して進む。遊び庭に結集した字民は八重瀬の御嶽に向かって奉納と感謝を捧げ、無病息災を祈願した後に奉納の芸能が始まる。北・南の出し物として芸能が演じられ現在まで継承されている。行事の中での道ジュネーイにおいて、旗頭、今年カーラー、大和人行列、唐人行列、大なぎなた、棒術、棒巻、女行列、綱引きの順序で演武する。唐人行列の中で、中国の役人一行の行列の様子を再現した演出構成があり、その中で按司の所望により二人体制で組手を行う場面がある。

【棒の材料と演武（舞）の種類】

南北それぞれ型をもっているが、対抗意識が強く同じ名称の型でも相手との違いを強調している。以前は、稽古も相手に見せないよう別々に行っていたという。棒術の型は、以前は以下のとおり南北に分かれて構成されていた。現在は1つになって行っている。

南：①邪斬り（ジャジリ）邪気払い ②ハジリ ③イリクマー ④牛若 ⑤サヤと棒 ⑥一方斬り ⑦四方斬り ⑧六方斬り ⑨不明 ⑩シー棒 ⑪棒巻（ウラ巻）現在は、①②③④⑥⑦⑩を演舞している。

北：①邪斬り（ジャジリ）邪気払い ②ハジリ ③タチヌ手 ④エイの手 ⑤サヤと棒 ⑥トウンボー ⑦佐久川のクン ⑧津堅手 ⑨ティンペー ⑩シー棒 ⑪棒巻（グーヤー巻）現在は、①②③④⑧⑩⑪を演舞している。

棒巻（ボウマチ）は、子どもと年寄りを除く男性全体で行う。南と北に分かれて隊列をなし、それぞれから一列で入場しグーヤー巻でひとつの円形になり棒巻を行う。演武に用いる楽器の内容と呼称について、道ジュネーイの棒術の際は、アナウンス（司会）が演武者や型の紹介を行いドラ鐘（カニ）は演舞者に合わせて打つ。カニ役は棒術の型や隊列のことを把握している方が行い指揮役を担う。棒巻の時には、カニ役が演舞者を囲むように配置される。棒の材質は桤材を使用し、六尺棒、四尺棒、三尺棒の種類がある。用具の調達には県内の武具専門店から購入している。富盛棒術の衣裳は、棒巻の先導は赤色の打掛、白黒脚絆、紫サージ、棒人衆は上下白衣裳に白黒脚絆、紫のタスキ、紫サージ。シー棒は胸に「富盛棒術保存会」と書かれた黒空手着上下を着用、頭に紫サージ、足のすねに白黒脚絆を着用。鐘打ちは青色の打掛、白黒脚絆、白上下に紫タスキ、紫サージ。いずれも履物は、白の運動靴を履く。衣裳・棒、他の用具の管理について、紫サージと白黒脚絆は個人管理と公民館管理がある。打掛は公民館で管理する。棒などの用具の修繕や製作、購入の方法は、個人の予算で購入、修繕したものと伝統芸能保存会予算で購入、修繕したものがある。

【由緒・来歴】

富盛の棒術は、村を守るために実戦ながらの訓練のなかから編み出されたと伝えられている。戦後、生活様式が多様化し、集落の伝承行事や生活習慣が次第に姿を消した。このままでは消滅してしまうのではないかと危機感が芽生え保存会を結成、月二回の稽古日を設けて伝承保存に取り組んだ。戦前の富盛には保存会などはなく、十五夜行事の練習に入る前に、師匠が各演目の配役や役割分担を決めた。復帰後、1986（昭和 61）年に富盛棒術保存会、1987（昭和 62）年に富盛伝統芸能組踊保存会、1988（昭和 63）年に富盛伝統芸能保存会が結成され、2001（平成 13）年には 3 つの保存会を 1 つに統一し名称を、富盛「十五夜祭り」伝統芸能保存会と改称した。

【棒演武・組織の構成員】

棒術の出演条件は、富盛在住、富盛出身者であること。戦前は 20 歳位から 40 歳までの男子、40 組（80 人）程度で行っていた。現在は、小学 4 年生以下の子ども、年寄りを除く男子のみで行っている。

【練習状況】

稽古のスケジュールについても戦前は、旧暦の 8 月 10 日に主だった人々が集まって各種出演者の人選をして、翌日の 11 日からは午前から猛特訓で、練習期間は僅か 3 ～ 4 日間で本番を迎えていた。現在は、本番の 2 週間前から練習を開始し、仕事や学校を終えてからの夕方などに行っている。棒の練習場所は、公民館前広場にて行っている。

【コロナ感染症等をはじめ行事継承の今日的課題】

後継者の育成やドラ鐘や棒を購入する予算の確保が課題である。コロナで影響を受けたこととしては、十五夜祭りが 3 年間中止となったため、指導や演武が停滞してしまった。

【引用文献】

『甦る伝統芸能 20 周年記念誌』（富盛伝統芸能保存会／2008（平成 20 年）8p.13p.26p.

『甦る十五夜綱』（企画／八重瀬町 製作／海燕社）地域創造 2008（平成 20 年）



写真3-3-7 南のシー棒



写真3-3-8 南のシー棒



写真3-3-9 棒巻



写真3-3-10 ハジリ



写真3-3-11 四方斬り

著：神谷 武史

3 詳細調査報告③ 八重瀬町字志多伯

【行事名・開催日・開催場所】

志多伯の調査を2024（令和6）年2月20日の聞き取りと9月17日火曜日に開催された獅子加那志豊年祭（シーシガナシホウネンサイ）に行った。豊年祭では、道ズネー並びに豊年祭舞台前広場における巻棒、舞台中に組棒が行われた。豊年祭の道ズネーは、獅子を祀る野呂殿内、根屋、4つの門中本家など8か所の拝所や御嶽を廻る。豊年祭のメイン会場は、志多伯西方にある馬場にて行われた。

【関連祭祀儀礼】

志多伯の棒術は、志多伯年中行事である旧暦6月15日のウマチー綱曳き、旧暦7月15日の七月綱、獅子加那志豊年祭（シーシガナシホウネンサイ）（旧暦8月15日、16日）、字敬老会にて行われる。獅子加那志豊年祭は、人の年忌法要周期と同様で1年忌、3年忌、7、13、25、33年忌のあたり年に行い、翌年からまた1年忌と繰り返す。その年の旧暦8月15日、16日に字民総出で実施される。年忌年以外の旧暦8月15日は獅子拝みが行われる。2024年は、戦後3巡目の13年忌豊年祭が9月17日盛大に開催された。旧暦8月16日にあたる2日目は、台風の影響により中止となった。次期は、2036年の25年忌豊年祭に開催される。豊年祭当日は、行事の主軸である獅子加那志を獅子屋から迎え、各拝所や門中を廻る道ズネーや豊年祭のメイン会場である馬場において巻棒と組棒、舞方が行われる。舞方は琉球古典音楽のかぎやで風節の演奏に合わせた棒術の舞で、獅子舞の前座に座清めとして演じられる。また志多伯棒術の演武構成の特徴として組棒や型の演武を、琉球音楽と融合した武の舞がある。その他、琉球舞踊や組踊、芝居、狂言なども継承されており、組踊の場面にて棒術を取り入れた演出もある。綱引きは、旧6月15日（ウマチー綱曳き）、旧7月15日（七月綱）の年に2回馬場にて行われ、そのなかで棒術やエイサーが1回目の綱曳きの後に披露される。主に子どもたちと志多伯獅子舞棒術保存会会員が演武する。豊年祭がない年の9月には字志多伯敬老会が開催され、その中でも複製獅子による獅子舞の演舞や棒術が披露される。

また、1980（昭和55）年から1990年（平成2）年までの間、地元の小学校運動会において全校生徒で行う綱引きの応援合戦にて志多伯出身の5～6年生男子が棒術を演武した。同町内にある高校の体育祭では120名による巻棒や集団演武の指導を担った。コロナ明けの2022（令和3）年には同小学校運動会にて学年毎の集団演武において志多伯棒術が採用され指導を担った。

【棒の材料と演武（舞）の種類】

志多伯の棒術では組棒や個人演武に六尺棒、サイ、トウンファー、ティンペー、ヌンティー、槍、長刀、エーク（櫓）、クワ、ヌンチャク、鎌などの古武道具を取り入れている。演武構成は、かぎやで風節の演奏に合わせて演舞する舞方、団体演武の型として「周氏の棍」「津堅の棍」「大掛の棍」「朝雲の棍」「佐久川の棍」「大屯棒」「添石の棍」がある。組棒は実戦的な戦いを想定した約束組手として構成される。双方六尺棒を持ち打ちあう二人棒、サイ対棒、トウンファー対棒、ティンペー対ヌンティー、エーク手、エーク対クワ、長刀対槍、3名が六尺棒を打ちあう三人棒、琉球古典音楽揚作田節の演奏で演舞する長刀舞、ヌンチャク、鎌の手などがある。舞方は古典音楽のかぎやで風節（歌詞：豊なる御代のしるしあらわれて 雨露の恵み 時もたがぬ）の曲に乗せて演じられる。また武の舞（ぶのまい）と称して多彩な古武道具による組技の演武と琉球音楽（主に三線、太鼓、鐘、法螺貝）を組み合わせた構成は、舞台芸能としての新たな演出である。獅子舞においても、前役の頭を支える構え方は空手の型「平安（ピンアン）」の型から取り入れた動作と伝えられている。演武に関する音楽や楽器については鐘（2名）、法螺貝（1～2名）、鉦鼓（1～2名）、太鼓（1名）が主体となり、「武の舞」の時は三線（2～3名）が加わる構成で行っている。

豊年祭の巻棒（一般参加者）の衣装は、豊年祭黒Tシャツ、黒ズボン、白黒脚絆、黒サージ、白タスキ、

白帯を着用する。保存会は、黒空手着（上下）、黒サージ、白黒脚絆、白タスキ、白帯を着用する。鐘打ちも同様である。いずれも履物は、運動靴か地下足袋で舞台では裸足で演武する。保存会が演目として「武の舞」（琉球音楽と融合した演出）を演じる際は、黒空手着上下に武の舞用衣装と入道頭巾、黒帯を着用する。棒をはじめとする古武道具、衣装管理は保存会で行い、公民館に保管する。また衣装の変遷について戦前は不明、戦後から1993（平成5）年までは白上下、紫タスキ、紫サージで個人所有であった。現在は、衣裳や道具の管理は保存会が基本行うが、会員個人で衣裳や棒など武具を所有しているものもある。一般参加者の白黒脚絆、サージ、タスキ、棒は公民館が所有し、参加者は公民館から配布された黒色の豊年祭Tシャツを着用する。衣裳・棒、他の用具の修繕や製作、購入は保存会会費や字補助金を活用している。これまで国や県の文化保存関連の助成金を活用し整備した道具もある。

棒の材質は、復帰後しばらくは県産桧材を使用していた。近隣に木工所があり、組棒用や個人演武用を製作依頼し購入していた。近年では、木工所もなくなり棒以外の武具も含め県内にある武具専門店やネット販売で購入している。

【由緒・来歴】

志多伯棒術の由来については、昭和初期から中期ごろまでは家庭ごとに棒術の型を持ち、その直系の子孫のみ伝授する環境であった。現在まで継がれている家系は、舞方の型を所有する1か所のみである。棒術や組棒については、戦前からの伝統的な型が途絶えたため、1975（昭和50）年当時、沖縄古武道道場に通う3～4名の志多伯出身者が、道場の師匠より基本型「周氏の棍」の地域での活用の許可を得て豊年祭や綱引きなど字行事で指導し現在に至る。

【棒演武・組織の構成員】

1997（平成9）年には「志多伯獅子舞棒術保存会」が組織された。棒術や獅子舞の主な活動人員は10代後半から40代で、鳴り物や演奏、また理事役員には60代から70代と幅広い世代が関わっている。1993（平成3）年に開催された13年忌豊年祭の後、次期25年忌豊年祭まで12年の空白期間に継承が途絶えることを懸念した高校生、中学生が自主的に集い棒術愛好会を結成したのが始まりで、その後、字志多伯では若者の文化活動支援組織として獅子舞棒術保存会を結成した。

【練習状況】

通常の稽古は、毎週木曜日と土曜日の夜19時30分から22時まで志多伯公民館で行われている。保存会活動の一環として字外からの出演依頼など、演武機会をつくることで後継者育成や指導者養成の場となっている。豊年祭の開催年においては、4月の字総会後、豊年祭実行委員会が設立され約3～4ヶ月の期間、棒術や芝居、舞踊などの稽古が行われる。棒術は馬場、それ以外の演目は公民館で行われ、一般参加の巻棒については豊年祭本番の2ヶ月前から実行委員により各世帯に呼び掛けが始まり、1ヶ月前から全体練習が3回ほど行われる。

【コロナ感染症をはじめ行事継承の今日的課題】

コロナ禍において保存会3代目となる現会長が、公民館にて沖縄古武道志多伯道場として開設したところ女性や子どもの参加が増えた。道場と保存会活動が融合し、これまで男性会員のみであった保存会に女性も加わり活動が再開された。コロナ禍を通じて女性や子どもたちの参加が増えたことは大きな収穫となった。また稽古場である志多伯公民館の老朽化に伴う建て替えなども字の課題であり、保存会活動の拠点施設保全についても関わりを持っていく予定である。戦後直後までは豊年祭には男性のみ参加であった規則を緩和し、時代に沿った体制づくりが求められている。2024（令和6）年に開催された13年忌豊年祭には、外部からの参加希

望者の受入れや女性による棒術の出演も認めた。獅子舞に関しては未だ原則男性としている。

【引用文献】

- ・『志多伯の獅子加那志豊年祭一年忌行事の八月十五夜豊年祭一』（上）
（志多伯伝統文化保存会／2010（平成22）年ふるさと文化再興事業）
- ・『志多伯の獅子加那志豊年祭一年忌行事の八月十五夜豊年祭一』（下）
（志多伯伝統文化保存会／2011（平成23）年ふるさと文化再興事業）
- ・『獅子加那志が鎮まる村』（企画／八重瀬町 製作／海燕社）
地域創造（2011（平成23）年度映像記録保存事業）



写真3-3-12 舞方



写真3-3-13 周氏の棍



写真3-3-14 巻棒



写真3-3-15 クワ対エーク

著：神谷 武史

4 詳細調査報告④ 八重瀬町字東風平

【行事名・開催日・開催場所】

東風平の調査を2024（令和6）年9月21日に行われた豊年祭で行った。東風平棒術は、豊年祭（旧暦8月15日・16日の2日間）にて演武披露される。近年は、旧暦8月15日直後の土日に開催している。豊年祭当日、旗頭・獅子・祝女・字役員・長寿会・ミルク・芸能衆・棒人衆の順で村屋（公民館）から「上大城」「ヌンドウンチ」「氏神」「城」「佐久間」「獅子脚洗井泉」の各拝所を順に巡って後、馬場の舞台前で演武を行う。地元での呼称は、「棒」（ポー）と呼ばれ、演武される型は西（イリ）と東（アガリ）に分類されている。

【関連祭祀儀礼】

行事は、村の豊年、区民の健康祈願を目的に行われてきた。加えて現在では区民の親睦を深め、稽古期間をとおした世代間交流によるコミュニティ力強化の面もある。字東風平では毎年選出される「十人頭（ジュウニンガシラ）」と呼ばれる役職と、字役員が連携して執り行われる。

【棒の材料と演武（舞）の種類】

西：フーチリ、サク（尺）棒、ワタジリ（腹斬り）、ウラワタヂリ、ピンアン、クーサンクー、スナキリ、ティンベ、三人棒

東：フーチリ、サク棒、ワタヂリ（腹斬り）、クミダ棒、チキン（津堅）手、ピンアン、クンヌ手、トゥン棒、ウシワカ（牛若）、三人棒

上記以外に、現在は演じられていない型でエークと棒、サイと棒、トゥンファーと棒、ヤマチ棒、シヌビグサンがあるが、復活の目途は立っていない。

棒巻（ボウマチ）は、西・東の演武者が合同で一列になり行列し、その後二列に分かれ「ヒーヤー・ユイ」の掛け声を合図に全員でヘーイ棒と呼ばれる三手ほどの所作を行う。再び一列になり円形の棒巻（ボウマチ）へと至る。巻が解かれ行列になったところで棒巻が一か所に退場する。棒巻の後、舞台に向かって上手側から演武者が登場し、舞台前で棒（型の演武や組棒）が披露される。最初は、西東双方から1名ずつ出て合同で組棒「フーチリ（封切り）」が披露される。その後、西東それぞれで、班単位、青年会、保存会という順で演武が1時間ほど披露される。また、舞台幕開けの演目である舞方棒は、琉球古典音楽のかぎやで風の曲にのせて演じる。棒術の演武の際は、ドラ鐘を演武に合わせて緩急をつけて鳴らす。

また舞方棒については、歌三線による演奏で曲はかぎやで風節で、歌詞は「石なぐぬ石ぬ 大瀬なるまでも 御掛けぶせみしより 我御主加那志」が歌われる。

東風平棒術の衣裳は、保存会会員は胸に「東風平棒術保存会」と書かれた黒空手着の上着に白空手着ズボン、頭には黒サージ、布製の白タスキを胸前でクロスするように掛けて背中で結ぶ。腰にも同様の白帯を巻き、足のすねには白黒脚絆を着用する。棒巻などを先導する保安員は、白上下の運動着に黒タスキ、頭には手拭はちまき、足には白黒脚絆を着用する。棒や古武道具の種類は、三尺棒（素・槍・長刀）、四尺棒（長刀）、六尺棒、七尺棒（槍・長刀）、ティンベ、サイなどがある。六尺棒以外は特注で製作される。

それら衣裳や棒など用具の管理は会員個々人が保管する。棒の調達は、以前は個々人で購入していたが現在は、保存会を通じて県内の武具専門店で購入している。

【由緒・来歴】

太平洋戦争の戦時中は中断したが、終戦後落ち着いてきた1947（昭和22）年以降に再興されて現在に至る。棒術にまつわる由来として、東風平の棒術は約250年余の歴史があるといわれ、オーエーティー（喧嘩棒）

といわれ、迫力と力強さが持ち味である。フーチリは西と東の代表（マチ頭）が封を切るということで、1 番目に演武される型である。戦前から豊年祭の拝みを終えた後、年少から高年の男子により披露されてきた。

東風平の舞方棒は、琉球史劇「大新城忠勇伝」に登場する琉球王朝時代の王位継承の件で、大新城親方と津堅親方の対立に勝利した大新城親方の心情をイメージして創作されたと言われている。舞方の特徴は、前に進むときに足を揚げて進むところにある。これは大新城親方が津堅親方に対して怒りを爆発させその首根っこを踏みつけうつぶんをはらす意の動作であり、心晴れ晴れとした心境から豊年祭以外でも祝いの座などで演じられている。

【棒演武・組織の構成員】

棒術に関する組織として字東風平は 1969（昭和 44）年に「字東風平棒術保存会」を設立した。棒術保存会が結成される以前は、それぞれの地域（班）の経験豊富な中高年の男性が指導していた。フーチリ棒や三人棒などの役目棒については、さらに経験豊富な中高年男性が公民館に集まり演武指導を行っていた。現在は棒術保存会がその役割を担っている。

【練習状況】

稽古については、豊年祭が土日開催となった現在は本番の 2 週間前から実施している。旧暦 8 月 15 日に豊年祭を実施していた頃は、旧暦 8 月 1 日から稽古を行っていた。稽古場所は村屋（公民館）前広場と隣接する馬場で行われる。集落以外での演武について、保存会の活動を中心として出演（演武）することがある。これまで主に海洋博記念公園、首里城公園、やえせまつり、八重瀬民俗芸能公演（国立劇場）、棒術フェスティバル（町主催）、棒術シンポジウム（県文化協会主催）などに出演してきた。字東風平棒術保存会は、八重瀬町民俗芸能連絡協議会に所属しており、町や県などの出演依頼を受けることもある。集落外での出演に関しては、時間の関係上演武時間や演武数には制限があるためその都度人選する。

【引用文献】

- ・『シーサーケラズ東風平神獅子とジュニン頭』（企画／八重瀬町製作／海燕社）地域創造 2024（令和 6）年度映像記録保存事業）



写真3-3-16 フーチリ



写真3-3-17 西のウラワタジリ四方切り



写真3-3-18 テインバ



写真3-3-19 西の三人棒

著：神谷 武史